

紀
路
草

上
下
合
冊

紀 路 草

上
下
合
冊

紀路草序

あめつち乃ひらはじめしより山となり海となりみやこ鯨とわかちてその名どころ繁くなれりける。昔時聖代三十二のおほむと（御時）国を五幾七道に定りしなかに紀伊国は南海道のひとつにして上ミ伊都郡は大和の国芳野山にさかひて（畧）下も牟婁郡は、志摩・伊勢国にちかし南北の塩路はわたるにとほく東西のかち（徒歩）ははこぶにはるけし。古き歌によめる名どころあまた侍りぬけれど、あるは八雲の絶間にもれし村里は次がれて名を知る人もなくあるは藻塩草にかきのこせし浦の跡はむもれて（埋）たしかならず。□りあるところに風雅に心ふかき人ありて、和歌の渚より詠みては漁夫をまねきてかくれたる嶋の名をたづね、みくまのや三津のお山にわけては樵夫を懐けて幽谷の旧跡を露しかつ古き歌古き文をひきて絶えたるをおこし、すたれたるをひろひ集めて終に二巻となし名づけて紀路草となん。むべなるかなとほつ国人はいたらずして紀の遠山のよすがたを求め所々住人はきゝつたふる所名にたがふ事おほかめればそのまどひをとくゆゑんとおのれしたがふにたえづてつたなきこと葉をふみのはじめにそふるものなりかし。

（六九五）
元禄歳次乙亥如月 日

紀路草序

豊芦原のあらゆる嶋の歌枕代々のあちつちの物語、かずくなる中に、此紀の遠山の山人も国つしまねの島守もその所に居て名を忘れ、名を聞きつたへてところをしらずなり、ゆきなむはいと本意なかるべきわざなり。ここに何某此片田舎の月下までをりくことに吟行しすき本^のけのあまり西行が破納を荷ひ、長明（鴨）が鶯駝に鞭うちて形見の浦乃磯まくら・三佐の美山の苔筵・霧に露に袖と袂にひろひ集て、其風の猶あきたらず。ふるき巻々よしある詠をゑらび出し、まじへつらね郡をかぎり里をわかちて、紀路草とつゞりあへり。由良の渡^とわたしても千里の濱を目の前にうつし、白鳥の関越ずしておのづから紀の川の流手にむすべり。これなん藤島の道志るべ居ながらにして知る事此二巻の中にありと、春雨の志たゝ里に筆をひたしつゝ、あまつ巻のかしらにすさみ侍参りし。

きのと亥中乃春

紀路草序

嘗^テ聞^ク詩^ニ有^ニ大義^一和歌又有^ニ二義^一詩文同趣感生^ニ於志^一詠形^ニ於無^一信動^ニ天地^一感^ニ鬼神^一視^ル人倫^ヲ莫^レ冥^{キハ}於和歌^ニ茲^ニ有^ニ佳客^一寓^ニ居于南紀^一之暇倫^レ閑^ニ於夜宴^一未^ダ暫^モ捨^レ筆^ヲ普^ク尋^ニ南紀之旧跡^一広^ク探^ニ古人之吟詠^一更互演^ノ釈自題謂^ニ紀路草^一一^{タビ}展^{ズレバ}卷幽崖宛一台之名所瞭然而層見疊出不必遠稽^ニ古籍^一正^レ之其詞花而^モ多^ク実^ル非^ニ後世可^レ畏之子^一乎謂然歎曰誠^ニ予雖^ニ襁褓之地^一茫^{タリト}然如^レ醉菽麥不^レ辨今对公汗顔滋甚堪^レ感還堪^{マタ}愧海内得^ニ此書^一不^レ走^ニ南紀之絶景^一燦然如^レ視^レ掌豈博^ク施^ニ齊衆心^一哉是以忘^ニ国陋^一漫序不^{シテ}得^レ已之志云爾

皆^{トキニ}

元禄八年歲次乙亥

花月旦遊庭子操ニ毫千紀峯庵窓下

紀路草并序

元禄乙亥の春南紀にあそびてここかしこ見るところは方角をしるし、見ざるところの旧跡は人にたづねて此ニ卷つらねて紀之路草と題す。これ明眠者の笑草なり。

株窓庵宗意書ニ千紀旅之机下

紀路草目録 上

伊都郡

妹背山 神岡山 萩原 行合坂 小田神社 大我野 東屋嶺 待乳山

庵崎 角田川 丹生神社 高野山 奥院 草燈 橋 玉川 今來峯 古城跡

那賀郡

岩手里 田中井戸 根来寺 粉川寺 風猛山 風森 龍門山 最初峯
荒田神社 植槻森 慈氏寺 高雄山 国分寺 海神社

海草郡

疫神社 紀関 白鳥関 坂上 大屋都比売神社 紀ノ川 鷺ノ森 朝棕神社

志摩神社 太田村 檜隈宮 日前宮 国懸宮 賢眞神社 鳴神社 高積比古社 高積比売神社

都麻都比売神社 満願寺 伊太木曾神 名草山 黒牛瀉 琴ノ浦 紀海 紀路遠山

名高浦 藤白王子 藤白山 伊久比売神社 刺田比古神社 岡宮 摩爲比売神社

伊達神社 竈山神社 香都知神社

海士郡

形見浦 妹ヶ島 賀田神社 形見山 葛城山 飽浦 磯浦 吹上 小江浦 雜賀浦
若浦 入江 玉津島 若ノ松原 牛窟 白木濱 白神 初島

紀路草 卷上

紀伊国

紀伊国者南海道六国之一也職原抄曰故実付レ読ニ伊ノ字ニ或曰昔秦徐福求ニ仙藥ニ來ニ此国ニ郷人爲ニ奇異人ニ故ニ曰紀伊又來ニ此国ニ故曰ニ紀ノ国ニ皆用ニ和名ニ曰紀伊也紀伊ノ名出ニ于此ニ民部式曰紀伊上ハ伊都那賀名草海部在田日高牟婁七郡也正税公廨各十七万五千束矣

△伊都郡

順和名云

神戶 カンベ

加美 カミ

村主 スグリ

楫理 イブリ

桑原

妹背山

妹背山とて二つなり 妹山是那賀郡勢田庄背山村の南二丁余紀ノ川乃南の辺にあり 背山は同庄背山村之西北ニ有 仙覺抄六卷の妹背山は紀の国なり いもの山せの山とて二の其中に吉野川流れたり 二なれども引合て伊もせの山とよめる歌ともあり 古今の歌にも 流れてはいもせの山の中におつる吉野の川のとよめり。此歌は一つにいひなしたれども 中に吉野川の流れたることを読みつればふたつと聞えたり 又伊もせ山と別によみたる歌もありと云々

万葉集七

麻ごろもきたればなつかし紀の国の妹背の山にあさまけわれも

藤原卿

草庵

吉野川いもせの山の中とても くらす鵜舟も夜も侍らん

頓阿

拾玉

妹背山霞の袖をひきかけて いはつとみする春のきぬとは

慈鎮

万葉集七

人ならばおやまのまなごぞあさもよし 紀の川の辺の妹と背の山

神岡山

類字ニ大和に入

此名所背の山の辺に有と見えたり 藻塩草背の山の部に出たり

玉葉 見渡せば白ゆふかけてさきにけり 神岡山のはつさくら花

夫木抄 神岡の峯の嵐や払ふらむ 背の山もとに紅葉ちるなり 泰光

萩原

加勢田庄中村の西北三丁に有 藻塩草に紀伊国名所と云へり さりながら證歌なし

〔千載 定家の歌に 萩原や野辺より野辺にうつり行く衣にし露の……〕

又萩原と云所日高郡にもあり 肉背山ニシガセの麓 原谷の処々に有

〔日高の萩原ナラン（芝口）〕

行逢橋

官省符庄神野村の中にあり 昔し詠ぜし櫻は枯れてなし 今は若木櫻也 土人誤て出合橋と云也

万葉集七 行逢の坂のふもとに咲出をり 櫻の花を見せん子もかな

小田神社

官省符庄小田村の東北二社の跡あり 神名帳曰 伊都郡小田神社

大我野

東屋村の西南の辺に相賀といふ所あり 大我野相賀和近し 尤も野原也此所成べし 宗祇国分に美濃国と有 然れ共万葉集に此歌は大宝元年（七〇一年）辛丑冬十月太上天皇太行天皇幸紀伊国一時歌十三首とある中の一首なれば 紀州の名所なること決せり

万葉 やまとは聞えもゆくか大我野 竹葉タケハかり敷くいほりせしとは

東屋嶺

此名所藻塩草十四卷に紀州乃内に入 今尋ぬるにかく云ふ所なし 大我野辺に東屋村あり 此所なるべき歇かいま □々？されば決し難く尋ぬべし 松葉集に載せたり

山家集 神無月スミダしぐれ晴るればあづまやの みねにぞ月はむねとすみける

待乳山 庵崎 角田川

まつち山は紀伊大和兩國乃境にあり 其れ故西国の名所に出たり 万葉集二に紀伊国とす 今みるに紀伊の国也 すみだ川は待乳川乃事なるべし 此川源は葛城山の中より出て 北隅田の庄を

流れて紀ノ川に入る也 隅田庄を流るゝ故隅田川と云ふか 松葉山に待乳山を讀合せたるにす
みだ川と又角田川ばかりよみたる歌と 二処に擧てともに下総の名所とす さりながらすみだ
川に待乳山をよみ添たるは紀州のすみだ川なるべし 仙覺抄第五卷云「まつち山ゆふこえゆき
ていほさきのすみだ川原にひとりかもねむ」と云ふ 古歌を擧ていほさき乃すみだ川原は紀伊
国也と云へる 此説に依りて待乳山に角田川を讀そへたるは紀伊の名所なると疑なし

玉 吟

月影のさすや庵崎角田川 越て待乳の山のかひより

家隆

夫 木

待乳山おろす嵐や寒からん 角田川原に千鳥なくなり

知海法師

いたつらにたのめしひとや待乳山 秋をわすれぬ女郎花かな

□家

丹生神社

高野乃麓天野と云所有 神名帳ニハ丹生都比女ノ神社といへり 日本紀曰神武天皇天香山^{ハニ}埴^{ハニ}以
造ニ八十^{イラカ}盆^{トナリ}而陟^{トナリ}ニ于丹生ノ川上^{モテ}用^テ祭^ニ天神地祇^ニ天皇^{ヌキ}拔^{トリ}取^{トリ}丹生川上之五百箇^{イホツノマサカキ}眞坂^{マサカキ}樹^ニ其以
祭^リ玉^フニ諸神^ニ続^ニ日本紀曰廢帝天平宝宇七年五月奉^ニ幣^ニ拾幾内群神^ニ其丹生川上神^ニハ者加^ニ黒毛馬^ニ
點^ニ也^ニ光仁天皇宝龜六年九月遣^レ使奉^ニ白馬及幣^ニ於丹生川上群神^ニ□馬也 元亨釈書曰紀州丹生明
神者弘仁七年^{（八一六年）}空海法師遊^ニ紀州^ニ求^ニ勝地^ニ漸上^ニ高野山^ニ岩蜜^ニ啗^ニ碎禁^ニ纂^ニ暮^ニ不^レ知^レ所^ニ之^ニ時婦人出来
リテ曰妾者山神也 此山方數百里願施^レ師空海至^ニ山中平坦^{ナル}所^ニ曰是福地也 當^ニ構^ニ於此^ニ奏^レ建^ニ
金剛峯寺^ニ神女者丹生明神也 神社考曰、丹生明神者天照大神之變化也 私曰或人曰丹生明神
者月読尊也此社四宮也 一丹生津女神^{ヒメ} 二ニハ蟻通明神 三ニハ高野明神 四ニハ嚴島明神也
此社の西南四町ばかりに西行堂あり 撰集抄曰西行が妻天野川の別所に住けりと云 又神社
の西一丁ばかりに有王が墓あり 有王は俊寛僧都が扈從の童也 源平盛衰記に云姫君出家の志
ありと仰せられければ、有王兄弟とかくして高野のふもと天野の別所へ具し奉り、それにて出
家し出にけり云々 山家集には待賢門院の中納言の局、小倉を捨てゝ高野のふもと天野と申す
山すまれけり云々

高野山

奥院 常燈 橋 玉川 三鈷松 神社 菴 金來峯

元亨釈書曰

弘仁七年^{（七七六年）}

空海紀州相^ニ勝攸^ニ上^ニ高野山^ニ創^ニ金剛峯寺^ニ矣

高野山金剛峯寺者官省符

省神野村の南三里計にあり 南都を去ること二百里 但し六町壱里か。八葉乃峯八乃谷壱千佛の菴、雲に聳へて鈴の飛出^ク也 一、西院 二、小田原 三、谷上 四、五ノ室 五、南谷 六、一心院 七、往生院 八、蓮華谷也 路傍の断碑多く立、霜に朽ちて形見に残る塚の本にも蔦生茂りていづれの世の人共しらず 大塔・瑜祇塔・影堂あり 金堂、本地五智如来は大塔の西南五六間にあり 龍光院は空海存日の時居せられし所也 釈明等も此寺に居住すと也 明算が事は釈書に載たり 那賀郡竹房村の人也 南谷雲山院は西行法師の居住の所也 清淨心院の中多門院は滝口入道居住の所也 琳瓚が旧跡あり 琳瓚の事は釈書に載たり 其他の事は繁き故爰に記せず

千載

暁を高野の山に待つほどや 苔の下にも有明の月

紅葉見し高野の峯の花ざかり たのめし人のまたるゝや何

寂蓮法師
西行法師

奥院

弘法大師の廟也 承和二年三月廿一日に息絶五十日の後 石を畳みて其中に諡^{オウ}り給はると云

此廟大塔の東北廿六町計にあり 姑耶山ハ廟の南二町許に有 仙人の居所と云也 摩尼山ハ廟の東南に有 揚柳山廟の北に有 大師の廟は忌垣のみ有て前に燈籠有 藻塩草四巻に昔の洞と云 此奥院の事か

拾玉

有がたや高野の山乃岩かげに 大師はいまだおはしますなる

慈園

夫木抄

入る月の朝日待つこそはかなけれ 高野の奥の苔のほらにて

公朝

新古

たかの山あけん光を待つ人の 長き夜きえぬ法のともし火

知家

新葉

高野山暁とほくます声に 光をのこすのりのともし火

如顯法師

橋 玉川

高野の橋は廟前にある故 御廟の橋といへり此右□□□□ 名木の柳あり蛇柳と云ふ

夫木

是や此の音に高野のはしならむ 聞わたりしにたがわざりけり 法性寺入道 関白

風雅集に云 高野奥に玉川と云ふあり 其水上に毒虫多かりければ 此流飲むまじき由示し置て後よみ給ひける

忘れても汲やしつらん旅人の 高野の奥の玉川の水

弘法大師

三鈷松

高野三鈷松は大塔の西十間計に有 元亨釈書に曰 唐元和元年（八〇六年）海持シテ 飯朝冷ニ船日手執ニ三鈷杵
一先占ニ靈区一使向ニ本邦一擲レ之其杵飛入ニ雲中一到レ此其杵還松枝於レ是知ル神女之言不虞也 風
雅集曰高野にのぼりて三鈷の松を見て

これやこのもろこし船にのりを得て 志るしをのこす松の一もと 阿一上人
雲玉集曰廿四日草鞋をつけて諸堂を巡視すれど 大塔御柱ども立心柱などきりて造作のあらま
しとも也 金堂もかたのごとくたてたるさま也 三鈷の松も昔の焼けて其たねおひとて忌垣し
めぐらしたるを見て

今はそのまつ暁やちかゝらん 千とせふるきもおひかはりけり 内大臣実隆

両天神社

高野両大神社は丹生明神・高野明神也 大塔の西南一丁計にあり 是を檀上両大社と号す

続古今

我あらばよも消えはせじ高野山 高きみのりの法のともし火

此歌高野山に住すなりける 此祈親上人歎き侍りて祈念し侍りけるに 此山の明神夢に告げる
となん

奄（靜蓮法師奄室）

千載集云 高野にまゐりて侍りたまふ 靜蓮法師が奄室にまいりたりけるに あわれに見えけ
れば

誰もみな露の身ぞかしと思ふにも 心とまりし草の奄かな 權大納言実因
続千載集に云 高野の奄室の前に藤の花咲きたるを見て

藤の花我まつ雲の色なれば 心にかけて今にもなかめつ 二品親王覺性

此歌は明遍の奄室乃歌か蓮華三昧院を明遍の庵室といふ也 名木の藤あり

今来峯

高野大門の東南にあり 或人の語りしは 有田郡にて今来峯は高野山とは別の所かと申侍り

糸我山を越え侍る時 此事を尋ねしに今來の岡と云ふ所有
続古今集天皇かくれて今來谷に納め侍りたるを嘆きて

今木なると山乃峯の雪だにも 志るくしたへば何か嘆かん

玉葉

藤並の散らましをしみ時 鳥今木の岡に鳴てこゆるか

読人不知

此歌藤浪とよめば有田の今木か 有田郡藤並庄今來の岡の辺に皇子八幡とて社有
後人に可レ

古城跡

相賀庄野村の東辺二恩地が城跡あり 今は田地となる 同庄細川村の北の山上に牲川が城跡あり
恩地川の事は太平記に載たり

△那賀郡

順和名云

神戸カウド

石手イワデ

福門フクモン

那賀

荒川

山崎

埴崎ハシ

岩手里

岩手の里は紀の湊より三里余川上也 高野粉河より舟にて下ればこの里を見る也

新勅撰

見ぬ人にいかで語らん口なしの 磐手イワデの里の山吹の花

読人不知

新続古

口なしのいはでの里は山吹の花 咲くよりや名付そめん

後二條院

田中井戸

田中庄内窪村と云所に有る也 紀ノ川也 藻塩草十四巻曰田中井戸は田を作らんととき井戸といひて 池を掘て水を溜めたる也 其水を田にまかせ入るに口を井戸とハ云なり 已上此説を以て見れば田中の井戸はいづくにもあるべし 然れ共類字の説なりとて松葉集に紀州の名所とす名所にとらば 田中の庄に福井といふ井あり 是なん云ふべきや故に松葉の説にしたがひ爰に題す

続古今

咲きにけり苗代水にかけ見えて 田中の井戸の山吹の花

待賢門院堀川

夫木抄

蛙なく田中の井戸に日はくれて おもたかなびく風わるゝなり

寂蓮

根来寺

山崎庄西坂本村東北の谷にある一乗山伝法院根来寺とは号す 寺僧の話に云、當時は昔根来坊といふ諸国遍歴の僧あり 熊野那智山に瀧籠もりせし時夢によりて 堀河院御宇寛治二年(一〇八八年)に建立して豊福寺と号す 其後覺鑲上人再興せしとなり 根来坊は勢州の人也 今伝記無きに依て子細クラ悉しからず 今見るに豊福寺は伝法院の西一丁許に有 元亨釈書二曰、覺鑲詣稻荷明神ト託シテ曰早皈紀州吉野川側一國得三所求ニ矣 案ずるに根来寺也 九社明神伝法院の西丁二有 覺鑲以前より有也と いづれの神といふ事を知らず 三部明神是は金剛部佛部蓮花部の三部の諸尊を本朝の諸神に配合して三部明神と号して奉崇せらる 春日明神是は覺鑲の逢へる所也 釈書曰鑲往昔興福寺從惠曉ニ習ニ唯識一一夕夢貴婦人抱レ鑲居ニ膝上一摩カシラ頭云汝雖ニ大法器一恨クバ非ニ我カ寺宝ニ汝於ニ他山國一恢ニ密教一而我又可ニ擁護レ汝我レ春日明神也云々 此恩縁によりて春日の社を建る也 右之三社はみな當社の鎮守也 密嚴院は伝法院の東南町半許二有 本尊キリ雖もみ不動也 此本尊は本来唐の青龍寺惠果の所持せし本尊にして 長さ一寸八分の愛染明王也 空海入唐の時是をもらひて皈國の後 東寺講堂の本尊不動の頭中に納る也 其後鳥羽院御惱の時覺鑲に勅ありて加持せしむ 御惱御平癒あり帝感喜有て 今度の褒物は鑲が所望に任すべしと也 鑲の勅答に東寺講堂の不動を望申し上げける 帝ノ云く朕此本尊を惜しむにあらず その跡空しからん事いかゞせんとも 覺鑲重て云 身不肖といへども替りは自ら造刻して還し奉らんとて右の本尊は 覺鑲に賜ふ所の不動を高野山にのぼせて本尊とし 新に伝法院を建立せられしに本寺よりは勝れ侍り 又覺鑲入定せんとせられしを一山の大衆聞付て 空海始に做事覺鑲が我慢也(慢々) 只理不盡に切殺さんとたくらみける由を聞て 覺鑲驚きやすからぬ事哉とて此不動尊を守りと根来の方へ逃げければ 一山の悪僧是を知りて伝法院を囲みければ 門弟防ぎかねければ 覺鑲不動の三應地に入り 大火光を現し忿怒の相をあらはし給ひければ 不動のかたち二尊となる 大衆議して曰、比ノ内一つは鑲成べし雖もみて見よとて 雖もみみれば二尊共に血走りて眞偽難レ知 衆大二怖れ皆々退きけり 夫より覺鑲此不動を招来し密嚴院に安置すと也 此事西行法師が撰集抄に載せたり 并に太平記に有 元亨釈書に曰 鑲營ニ伝法

新院ニ羸ニ于本寺ニ寺徒嫌^レ之覃ニ鑠^レ之入定ニ欲^レ擯^{セント}之蓋嫉^レ配ニ始祖ニ之鑠元持ニ不動尊ニ寺徒鼓躁^{シテ}入ニ鑠ノ房ニ不^レ見^レ鑠只不動之ニ像在^レ之胥議^{シテ}曰 其一像ハ必鑠之百計攻^テ活^テ遂受ニ狼狽ニ云々

雪玉集云

実相院といふ所につきて されかれうち休み居たるほどに初夜の鐘を聞く

あけばまたいそぎでいでむかり枕 ねよとねごろの鐘ひびくなり 堯空法師
本堂伝法院にて思ひつゞけはべりし

高野山わかれてこども殊更に 法を伝へむ代々の爲かも
きりもみ不動を見て

うごきなき身を分けてける姿ぞと 血の涙をもこぼしたる見ゆ

覺鑠の廟は伝法院の南ニ町計に有 影堂は西南ニ町余に有 その昔ノは有しといへども天正の
比悉く亡びて 今は宝塔一字残りて 其外は形^チ計り

粉川寺

鎌垣庄風市村に有 補陀洛山觀音寺と号す 本尊は千手觀音也 粉川と云へる源ハ本山より出
て觀音堂の南東を経て中津川に合して南方紀ノ川に入る 元亨釈書曰、粉川寺ハ宝龜元年^{（七七〇年）}二建
ニ那賀郡ニ有ニ大伴孔子古ニ道接ニ山谷ニ夜ニ窺ニ猪鹿ニ投ニ弓矢ニ建ニ此寺ニ已上畧出 粉川寺と云事は
昔河内国澁川郡に佐太夫と云者あり 觀音の告に依て紀州那賀郡風市村に至りけるに 一つの
潤川ありて東西にわたり河水白きこと米の粉の如し 夫より粉川と云となん 元亨釈書に出た
り 粉川寺縁起有觀音の靈驗三十三をあらはす 其中に粉川寺の十三代の別当実覺法師不調御
成こと有て久安六年^{（一五〇年）}寺務を止られ 彼寺にも住まず成て侍りたるが 時経て安元二年^{（一一七六年）}之春熊野
に詣づとて粉川寺の前を通りける時ふしをがみて

見るたびに袖をぬらして過るかな 親のながれのかかはと思へば

とよみて侍りたる前途をさして田辺の宿にとまりける 旅床の夢中に御返し有て夢にみえける
となん

人の子の底の心のにこれるは おやのながれにすまぬとぞしれ

右の一首は玉葉集に入たり

風猛山

かざらぎ山は粉川観音堂の後の山也 諸本にかつき山又かさけき山とあるは誤り也
彼ノ寺の縁起ニ曰ク 紀伊守藤原重經発心の時（一〇六五年）康平七年六月廿八日當寺の観音薄墨染の衣を着たる僧内陣より出て告て曰

玉葉

花衣かざらぎ山に色かへて 紅葉の洞の月をながめよ

此歌によりて入道せられたり 粉川寺別當所の能覺法師に會して受戒し素意法師と号す 此歌の中に紅葉の洞と云ふは大和国多武峯を云ふ也

風森

粉川寺の南方に島村と云所あり 具サには風市の森と云 元亨白書曰、風市村と云フは此所の事也 粉川も風市村の内也 此所に神社有風森明神と号す 公任ヤマトウ家集に云、粉川寺に詣て来て風森といふ所にて

いとこゑも花のあたりはあだなるを いかになれとか吹く風の森

粉川村の北の辺に称名寺といふ寺有 此寺は河内国澁川郡の佐太夫夫婦出家して居住する也 佐太夫が事元亨釈書に出たり 昔は尼寺にて有しと也

龍門山 最初峯

龍門山は粉川村の南 紀ノ川南の辺に有又勝神山とも云 山の半腹に勝軍地藏の社有 山頂に池有ちりなし池といふ 土人誤てかつかみ山といふなり 此山のことは太平記に出たり 最初峯は龍門山の西二十計に有 太平記に出ず

荒田神社

廣田庄森村の西辺に有 両社有 一社は天照大神荒魂応作 一社は丹生明神也と云ふ 神名帳那賀郡荒田神社二座と云へり 昔は常念仏堂有となん今は絶てなし

海神社

池田庄神領村の西北に有 土人伝て云、此神は紀ノ水門より出現したる神也と云 昔は末社仏閣ありとなん今本社計り也 神名帳に那賀郡海神社といへり

植槻森

田中庄黒土村の西南にあり 清少納言枕草紙にうゑつきの森といふ名を載せたり

慈氏寺

此寺の妙音清音の二菩薩の臂の落たるを 信行沙弥糸を以てつなぎたれば二菩薩の音声を顕して善き哉痛敷哉とのたまひたれば 豊慶法師此事を聞てあらたに彩色せられしといふ また元亨釈書廿八巻に出たり 此寺の事紀路一見の時尋ねしに絶てなしとぞ

高尾村

貴志庄神戸村の東南十二町計に有 平家物語に名草郡といへり 今は那賀郡に入りたり

国分寺

国分庄の東国分村の西北に有 釈書資口表曰天平九年三月詔三每州一造丈六釈迦及菩薩ノ像一並三寫三大般若經一部六百卷一是国分寺之權輿也已上 今此国分寺も其時建立したるが諸国に国分寺と云所あり 但し今の事に本尊は薬師脇士は日光月光并に十二神將あり 後に改めたる事か覺束なし 諸国の国分寺行基に勅有て開祖たらしむ

△名草郡

順和名曰

大屋 ^{ノオウ}	直川	苑部 ^{ソノベ}	太田	大宅	忌部 ^{アリマ}	誰部 ^{アタベ}	断金	驛屋 ^{ウマ}
野応 ^{ノオウ}	津麻神戸	国懸	島神戸	有眞	八荒賀	大野	且来	
日前神戸	伊太祈曾神戸	須佐神戸						

疫神社

昔畿内の堺に十所乃疫神を祭らしむ 紀州大和の堺と泉州紀州の堺にも疫神の社を建と也 延喜式第三云 大和与三紀州一堺八和泉与紀伊堺九云々

紀関 白島関

山口村雄山にあり 山口村といふは和泉国より紀州方へ越る南の山の麓也 紀関白島関は諸書に各別に載せたれども同所なるべし 如何となれば顕昭が袖中抄曰、たつが弓の註に曰、たつ

が弓とは考フルに紀伊国の風土記ニ云弓のとおつかを大にするなりければ紀伊国の関守が持弓なりと云々 右の説を考フルに紀ノ関昔雄山に有と見へたり 山口村の東に夙村とて年久しく弓打所あり かのたつが弓のいはれともいひつべきか 又白鳥の関の事藻塩草七巻云 一説曰、たつが弓とは女の弓になりたるを云也 昔男ありけり、女を想ひてふかく愛でしけるほどに夢に此女の我ははるかなる所に行なんとす 但形見をば止めんとす 我が代りにあはれにすべき也といひけるほどに夢覺めて驚て見れば女はなくて枕がみに引たてたり 朝間敷と思へばさりとてはいかゞせんとして 其弓を傍に立て明けくれに手にとりのごひなどし 月日経る程に白鳥と成て飛て遙に南の方に雲に付て行 尋ね見れば紀州雄山に至て又人に成て失ひぬ 此女は彼山の関守の弓にて有けりと云也 右袖中・藻塩草両説を考フルに紀関・白鳥関は同所たりと見えたり 故に爰に一所に顕し侍る

類聚

おもふにはちぎりも何か朝もよひ 紀の川上乃白鳥の関

鴨 長明

万葉四

我せこが跡ふみもとめおひ行ば 紀乃関守や射とゞめんかも

金村

玉吟

引とめよ紀の関守がたつが弓 春の別れを立や販ると

家隆

坂上

此名所万葉集に出て松葉集に載たり 案ずるに今山口の里の西に坂上村と云所あり 此所なるべし 藻塩草十七に見ゆ

紀の国のむかし弓雄の響矢^{ナリヤ}もて 鹿とりなびく坂の上ぞある

無名

大屋都比売神社

カムヤシロ

大屋都比売神社は平田庄宇田森林中にあり 順和名曰大屋と云は是也 名草郡に大屋と云所

ニヶ所^ニにあり 今は大屋直川とつゞきたる所也 神名帳云名草郡大屋都比売神社 名神大月 此社次新嘗

延喜式三巻に載たり臨時祭二百八十五座の一座也 神代卷曰素盞鳴尊之也子号曰ニ五十猛命ニ大屋都比売命次抓都命凡^リ此三神能^ク分^ニ布木種^ニ即奉^レ渡^ニ紀伊国^ニ

紀ノ川

此川八源ハ吉野也 伊都・那賀・名草の三郡に流るゝ川也 藻塩草に妹背川の項に吉野川の末

と云 妹背川のほとりにては妹背川ともいふか 紀州第一の大河也 紀の湊吹上の濱にて海に入たり

名寄

春たけて紀ノ川白く流るめり よしのゝ奥に花や散るらん

泰時

玉吟

むねもこゑ袖にかけても朝もよひ 紀の川波はかへる瀬もなし

家隆

夫木

今朝よりはゆく瀬の水も朝もよひ 紀の川上に永しぬらし

僧正行意

万葉集

朝もよひ紀の川上を見渡せば かねのみたけに雪ふりにけり

法橋顯照

同 夏よりも朝つゝみせん仮衣 紀の川の水朝渡して

鷺森

和歌山乃内に有 若山は紀州の府也 本町・鷺森・宇治・岡・広瀬・水門・吹上・新町・荒地を合せて和歌山と云也 本より府城あり 此中に神社佛閣数ありといへども 書籍に出でざる所は不_レ載 鷺森は昔永祿の始つかた迄は河原にて鷺の森と云人里也 然るに本願寺の御堂を和歌ノ浦より移して堺を限りしかば 其境内をさして鷺の森と号す 天正八年四月より同十七年七月迄は 本願寺第十世顯如僧正居住せらるゝ故眞宗一流の本寺也 王代一覽七に曰、天正八年大阪本願寺門跡光佐_{号顯} 勅詔に依じて大阪の城を信長に渡して 紀州雜賀に移るといふは

此鷺森の事也 照蒙記曰、天正八年四月十日に紀陽鷺森に御居住と云々 信長記_ニ曰、信長公矢部兵七以て此処に謝せられしと也 當寺文明_(一四七六年)八年本願寺の第八世蓮如上人始て海部郡清水(冷水)浦に草創也 正親院勅使此鷺森に立_テ給ふ事本願寺家の書に見へたり 朝掠_{ウツ}神社本願寺の境内にあり 此社昔は府城の中に有て此地に移ると云々 鷺森に移る故鷺森明神と号ス 神名帳云、名草郡朝掠神社

志摩神社

若山東中之島村之内にあり 順和名に嶋神戸と云は此所か 神名帳四_ニ名草郡志摩神社此社延喜式第三卷に載たり 臨時祭二百八十五座の一座也

桧隈宮

日前宮
国懸宮

若山の東十町余に有 日前・国懸両大神を祭る也 神代卷二曰、神入ニ天石窟ニ而閉ニ磐戸ニ天ノ下常闇時思兼神思而白^{シテ}云宜圖ニ造彼神像ニ而奉ニ招禱^ヲ□似ニ石凝姥^ニ爲ニ治工^ニ採ニ天香山之之金^ニ以作ニ日矛^ニ又全^{ウラ}剥^{ハギ}眞名鹿之皮^ニ以作ニ天羽鞆^ニ用^レ此奉^レ造ニ三神器^ニ□紀伊国所^{マシ}座^{マス} 日ノ前ノ宮也 神社考曰、紀伊国名草郡日前国懸大神者是也 昔天照大神天の岩屋にこもりまし^クし時思兼神はかりごとをなして この神のかたちを造り奉らんとて 石凝姥を治工として天ノ香久山の金をとりて日矛をいさせ給ふ 始め鑄損じて少ましませば又鑄直し奉る 今の内侍所にておはしける始めの鑄損じたるは日前宮の神鏡也 又天ノ香久山の鹿をとらへて いけながら皮をはぎ天ノ羽鞆を造る 是を日前国懸と申し奉る也と云々 此事仙賣抄十五卷・西行撰集抄其他の諸書に出たれば 今具さにするにいとまあらず 神名帳曰、名草郡日前宮社

名草郡大月次
相當 新嘗

国懸神社

名草郡大月次
相當 新嘗

延喜式四時祭下ニ曰ク日前ノ社一座絹三絢四銖綿八屯五兩調布六端八尺木綿

二斤八兩酒稻百策（神税）国懸社一座絹四足絲三絢四銖綿八屯五兩調布六端八尺木綿二斤八兩酒稻百策（神税）又此二社臨時祭の二百八十五座の随一也 今の秋月村に鎮座有し時代垂仁天皇十六年に毛見浦より此所に移し奉るとなん 西の方は日前宮・東野方は国懸社也 社家伝に曰、神武帝東征の時以ニ三種神器^{カガミ} 天道根命 令^レ奉^レ祭^レ之 命之来ニ此州ニ安^レ之於毛見浦海中巖上ニ日前神社は鏡也 国懸神社は矛也 其矛は日神未^レ出^レ窟^ヲ造所故曰クニ日前^ト矣 此宮の一里計南に名草山あり

風雅

名草山とるや櫛のつきもせず 神かざしげきひのくまの宮

賢眞神社

日前宮の東北有馬村の東にあり 有馬村は順が和名に載せたり 神名帳曰、名草郡賢眞神社

【神名帳ニハ堅眞音大神社

本國神名帳ニハ正一位有馬音大神 三代実録 堅真ノ神（芝口）】

鳴神社

日前宮の東に鳴神村と云ふ里あり 此里の東に社有 同^{（今は若山の東南の野にあり芝）}じ森の中に妙幢菩薩の堂あり 神名帳

曰、名草郡鳴神社 名草郡大月次 延喜式云鳴神社一座絹一足絲三絢調布三端木綿十三兩酒稻五十策

相當

(神税) 同三卷に載せたり 臨時祭第二百八十五座の一座也

香都知神社

鳴神村の東妙幢菩薩の東三町計に有今社絶てなし 田畦の中に一ツの石碑あり 彫刻^{シテ}天香都知神社と号す 神名帳曰、名草郡香都知神社

高積比古社 高積比売社

此二社は和佐庄和佐山の中にあり 神名帳曰、名草郡高積比古神社高積比売神社

満願寺

岡崎村寺内村二有 弘誓山と号す鳥羽院の建立也 束草集第三紀州満願寺供養文云、夫以^レ精舍稀ニ構勝善之衆中善衆上^ニ也 終佛閣成ニ夙功ヲ添ニ供養之莊嚴ニ調^ベ高顯一如^レ雲構ニ飭讚嘆之齋席^ニ加之^ニ本佛十一面大誓重^{ネテ}開ニ青蓮慈悲之御眠如經八軸真文^ニ新ニ揚ニ白蓮譬喻之名題^ニ乃至云々 貞和三年^{三四年}丁亥二月十八日定家熊野御幸供奉記に 定家曩に日前宮に勅使^ニ上^レ参ける時此寺に休息せられしからば住僧出て申さく 昔の御幸の時連^マ囀^マは今にまされりと申したりしに 定家腹立て出られし事を記す

都麻都比売神社

都満都ひめの神社は山東ノ庄吉礼村^{キレ}の内に有 順の和名に都売^マの神戸云是也 神名帳曰、名草郡都麻都比売神社^{名神大月次新嘗} 神代卷云素戔鳴尊之子号メ曰ニ五十猛命大屋津姫命次抓津姫命^ニ凡此三神亦能分ニ布木種^ニ即奉^レ渡^レ紀伊国^ニ也 延喜式三卷に載たり 臨時祭二百八十五座の一座也

伊太祈曾神社

伊太祈曾神社は山東庄伊太祈曾村に有 名順が和名抄に載たり 神社考に伊太祈曾に作る神名帳曰、名草郡伊太祈曾神社^{名神大月次新嘗} 延喜式ノ二二曰、四時祭下ニ曰、伊太祈曾一座 絹二疋 絲三絢 調布三端一丈七尺 木綿十三両 酒稻百策^{神税} 同三卷に載る 臨時祭二百八十五座の一座也 神代卷曰、五十猛命之神天降之時多將^テニ樹種而降^ル 然^{レトモ}不下^ニ植^ニ韓地^{カラデ}一^ニ尽^上以持帰還始

自^{ヨリ}筑紫^{イマシマス}凡大八洲之國莫^レ不播^ニ殖而成^ニ青山^{ユエニ}焉所以称^ニ五十猛尊^ニ為^ニ有功之神^ニノ川紀伊國所^レ座大神是也

竈山神社 靜火神社

竈山神社者宮郷和田村の内に^ハ有 神名帳云、名草郡竈山神社^{大神} 靜火神社は和田村の北の辺にあり 靜火神社は延喜式第三に載たる二百八十五座の一座也

名草山

和歌浦の東入江を隔て有^ル山也 名草郡の山也 此山計^リ名草山と云べき儀なしといへども 古歌に和歌浦を競合せたれば 此山を名草山とは定め侍れ 此山に寺あり、金剛宝寺と号す 光仁帝御宇宝龜^ハ年中^ニに建立と也 又自然の井三つあり、清淨水・揚柳水・吉祥水と号す 故に紀三井寺とも名付け侍り 觀音堂一宇宝塔一字あり 此山の眺め和歌浦・雜賀浦・四國島・淡路島・其外浦々見えて無双の地景也

夫木 白雲の千重の衣手たちわかれ けふやなぐさの山路こゆらん

家集 思ふごとになぐさのはまのはまのなぐさまば 浪のよるまもあらじとぞおもふ 兼輔

愚草 友千鳥なぐさのはまのはま風に 空さへまさる有明の月 定家

千五百 思ふことしばしなぐさのはま千鳥 あとこそかよへ若の浦わに 有家

夫木 里かよふ蟹のゆきゝもあとたえぬ たれとなぐさの浜の白雪 雅經

紀の國の名草の浜に貝ひらふ あまのめざしの音なかりせば 読人不知

此浜に布引の松とて 元祿^{（六九〇年頃）}の始つかたまで朽残りたる松ありたり 今は其木もなし 若木の松有 古人布引の松と号す 清正が讀し松此処にやあらん

家集 はかなしやけふの子ノ日を過さまし 名草の浜に松なかりせば

琴ノ浦

若ノ浦の東南毛尾^{ケビ}浦と船尾浦の間に有 今^ハ此所海士郡也 昔日前宮の神鏡此所よりあがりたるとなん 其を船尾^{ケビ}浦の宮に納めたりしに 垂仁御宇今の秋月村へ移し奉る也 今も小社四座あり大神宮・日前宮・中言の明神等也

夫木
雅永記

春風に波のしらぶる琴の浦 かもめの遊ぶ所なりけり
此頃や名をかる春のしらべさへ 又あらたまる琴の浦浪

仲正
飛鳥井正雅

黒牛瀉

藤白山の北船尾浦の東に黒江浦と云所あり 今此所海士郡也 此里昔は入江にて干瀉の中に黒き牛に似たる石あり 汐みつればかくれ、汐干瀉となればあらはれ侍る石に因て、名付ヶ黒牛瀉と申と也 寛永(一六二四一六四四年)の頃迄天王山飯見崎の東半町計迄は入江也と此浦の老人語り侍る 又天王山に寺有本願寺と号す 此寺は本願寺の第九世光兼美如人僧都の再興せられし寺也 始天能寺といへる眞言宗の寺にて何れの世に開基せしと云ふことを知らず 此地の景色すぐれたる也 前に藤白山・冷水浦など有て 近年塩浜など拵て陽にうつる塩竈のけむりなどいとおもしろし

万葉九

黒牛瀉塩干のうらを紅の玉裾タマモ すそをひきゆくは誰が妻

同

古家イニシエに妹がわが見しうばだまの ころうし瀉を見ればさぶしも

人麿

くろ牛瀉こぎ出づる蟹の友船は 鱸ススキ釣りにや波もわくらん

顯仲

名高浦

藤白山の北の辺に有 人誤て名方と云 此所今は海士郡也 近年塩浜と成て昔の景色にはかはりたり

名寄

夜半の月名高の浦の浪の上に 秋はなかばといかにすむらん

信実

夫木

紀の海の名高の浦の浦に行 舟のまほにも人をあひみてしがな

兼家

藤白皇子

王 九十九王子は攝州窪津皇子を初めとして同国阿倍野皇子王を第二とす それより続く也

名高浦の南藤代村之中に有 此所より熊野山也 世俗俗に此王子熊野第一の華表也と云へり 熊野道中に九十九所の王子の社あり 其随一也 元亨釈書円善が伝に熊野肉背山シシノセに遊と書きたれば 此所より熊野山といふ事しかるべし また藤代山に鈴木三郎・亀井六郎が旧跡あり

名寄

千早振君が千年を松の葉に かゝりて咲ける藤白の神

安藝

藤白山

藤白山より十八町の坂を御坂ミサカと云也 峠に寺あり開基は明ならず 天台宗也地藏峯寺と号す

本尊の石像を安ず 像の後に彫刻して曰、勸進聖揚柳山沙門心靜大工薩摩權守行經元享^(一三三三年)三年云々 傍に王子社あり 又寺の西北の方に御所ノ芝といふ所あり 熊野御幸の時頓宮の跡也

是より見たる眺望いとおもしろし 誠に秋津島にならびなしとも云ふべきか 遠く見れば四国ノ島は遙にして夕日に淡路島のこりぬ 近く詠^{ナガ}むれば妹が島・磯浦・白浦[?](浪)・吹上・和歌浦・雜賀浦・紀の海に帆懸ケて行かふは四方へ走る船にて 霞もやらぬ吹上の浦とふこしはありまゝ也 和歌・吹上の手に取る様にて 麓に名高・琴の浦・冷水・干瀉^{ヒカ}浦など云所あり 又此^{ナカメウツ}峠に千年へぬらんとおぼしき松あり筆捨松と云 昔一条院の御宇に金岡と云画士此所に来て詠寫^{ナカメウツ}さんとせしに 絶景に筆を捨てと云ひ侍りし

夫木

藤白の山の御坂を越もあへず 先づ目にかゝる吹上のはま

為家

続後撰

藤白の御坂を越て見渡せば かすみもやらぬ吹上の浜

僧正行意

続千載

藤白の御坂の松の木の間より 夕日に見ゆる淡路しま山

藤大納言公任

夫木

一志ほのみどりの外も色やそふ 花咲く春の藤白の松

安嘉門院四条

同

行春の末葉にかゝる藤白の 松にのこりて花はすくなき

定意

紀海 紀路遠山

紀の路 紀路の遠山は惣ての名なれば方向を指シ難し 歌の心にて明也

名寄

紀の海の底をふかめて結てし 妹がこころはうたがひもなし

衣笠

同

紀の海に鯛引網のおきかけて ？く？と見ゆるうけの数かな

玄信

同

浦人や浪間を分けて紀の海の 見なべ^(南部?)の方にいそなつむらん

為家

新古

紀の海の眞砂吹上ふく風の はやく相見し人はわすれな

頼人

夫木

紀の海の雜賀の浦の沖つもの 春の日ぐらしかづく蟹人

爲口[?]

千首

紀の海や春は長閑^{ノドカ}に立かへて 今朝声遠く沖つ白浪

慈鎮

名

何として月をまたまし由良の崎 猶雲かゝるきぢの遠山

道家[?]

月清

龍田姫紀の路の山を行めぐり まつの外をは染渡らん

道家[?]

続古

明渡にあしやの浦の浪間より ほのかに見ゆる紀路の遠山

道家[?]

伊久比売神社 刺田比古神社

麻為比売神社 伊達神社

一般に岡ノ宮ト称ス岡町ノ産土神ナルベシ 中古九龍大明神ト称セシヲ近
世唯一神道トナリ 名ヲ昔ニ改メテ刺田比古神社ト云トモ 吹上ニアリ 今
小野町に鎮座 応永年間の棟札に伊達神社ト記セリ

此四社神名帳に名草郡にありといへども いまだその所在を知らず神職の人に尋ぬべし

△海部郡

順和名

賀太 浜中 全戸 □家[?]

形見浦 妹が島

賀田庄賀田浦の西の浜十二三町の処を云ふと也 妹が島は此浦の西北の海中にあり逢^{トマ}が島とも
靱^ツが島とも云也 春秋順逆の山伏峯入の時は葛城山の宅崎の島成る故必ず此島に渡海して行法
を修せらる 観念窟・序品窟・深蛇窟・閼伽井・劔池とて五ヶ所の行法所あり 田辺磯間浦の
南の方にもかたみ浦と云所あり 延喜式七曰、紀伊国所献簿鯨四連生鯨・生螺^{ナマシ}各六籠 都志毛
古毛^{コモ}各六籠 螺^{ナマシ}ノ貝・焼塩十顆并令^下ニ加多^{カツギ}ノ潜女^{カツギ}十人ニ量^{ケウ}レ程採^ルリ備^上云々

新勅

風寒み夜の更け行て妹が島 形見の浦に千鳥鳴く也

鎌倉右大臣

類聚

妹が島形見が浦の藻刈船 よるべも見えぬ浪のこころは

俊頼

名寄

入月の形見の浦の朝明けに 出かかはりたるいもが島かな

鷹司

賀田神社

賀田浦に粟島明神とて社有 何れの神を祭るといふことを志らず 神名帳曰、名草郡賀田神社
三上 昔此所名草郡か今海士郡也 形見浦は藻塩草四巻に出て紀州の名所かと云々 賀田浦・
かたみ浦に極たらば形見山も此所か 宮木引といふに依てみれば粟島明神の山なるべくや又外
に形見山有か不知

藻塩草

宮木引袖さへ寒くあさごろも 形見のやまにあらし吹くなり

読人不知

葛城山

かつらぎ山は大和の名所たりといへども 紀州賀田浦よりかつらぎ山のつゞきなれば山伏の行

法多し 海士郡・名草郡・伊都郡より河内国に出て二十里余の峯筋かつらぎ山也 紀伊の内にても逢^{トマ}が島・尊国山・弁財天・七井八幡宮・伽陀寺・一の宿・二の宿などと云行所皆賀太の辺に有 上丹生屋の神社・中津川・鴛川・今畑・神通村水の宿^{ヤリ水の宿}・堺谷^{境谷}・蜘蛛ノ宿・西三谷・北志野など云所是那賀郡の行所也 鏡の宿・蛇王ノ宿・不退寺・小峯寺など云は伊都郡の行所也 其外名草郡にも有といへども繁きが故に 爰に不^レ出仍大和の名所ながら記^レ此西行が撰集抄に過にし頃 紀伊国の方にまかりて侍りしに 葛城山の麓に四方晴れ渡りたるが 風などもさしていたむべきにもあらず云々などかきたり

堀川

かつらぎや木垣に光るいなづまハ山 伏の打火をとこそみれ

兼口[?]

名寄

かつらぎや雲も霞もやどりにて 花を片寄せ春の山伏

光明峯寺

飽^ア浦^{クラ} 飽等とも云

賀田浦の南に田倉崎と云所有 是なんあくらの浜也と云 松葉集に飽浦はあきの浦となし飽等はあくらとなし二所に擧げたれども一所なるべし

万葉

網引^{アビギ}する海士^{アマ}とや見らん飽浦^{アクラウラ}の 清き荒磯^{アラソ}を見にきし我を

人丸

一字抄

日を経つゝあくらの浜の忘れ貝 わすれ果ぬと聞くぞかなしき

俊頼

磯浦

あくらの東に磯脇浦といふあり 是磯浦なるべし 外に磯浦といふ所なし

夫木

卯の花のころほひなれや磯の浦に たつき波のおるとしおもへば 俊頼

同

秋の日の磯の浦わの蜚人は 菊咲く道に塩や汲むらん 後九条

磯の浦の東に松江浦と云所あり 平家物語の月の巻に白浦・吹上・和歌の浦とつづきたれば白浦は此松江廻りをいふか 志らゝは白良と書く別の所か知りかたし 證歌なし 但紀の名所なる故吹上・白浦・和歌の浦など詞のつゞきにいへるか 里人此辺を二里ヶ浜と云也

吹上

浜 瀬戸 小野峯 神 眞砂山

吹上の浜は若山の西南若ノ浦の北に有 今は田畦となる人家松林散在せり 此名所諸書に出て其名声高き故委しく記すに不及 うつぽ物語に云、紀州牟婁の郡神奈備の種松といふ長者 吹

上の浜に四面八町の家作りし也と云々

堀百 沖つ風吹上の浜寒 れば 冬のよすがら千鳥なくなり

水緑

山家 波かへす吹上の浜のすだれ貝 風もぞおろす磯にひろはん

西行

吹上の社は今みるに湊小野町にあり 是を吹上の神と云か 一説に関戸村の矢宮を吹上の社と云へし 昔は大社にて雑賀庄廿一村の氏神也 今に至ては其外社は有ども皆此神の末社又は近代に観請したる也 山家集云、侍賢門院乃中納言のつぼね小倉をすてゝ高野山の麓天野と申す山に住まれけり 同じ門の師の局都の外の栖とひ申さではいかにとてわけおはしたりける有りがたくなん 販るさに粉川へ被^{ソボネ}参けるに御山より出合たりけるしるべせよと有ければ 具し申して粉川へ参りたりける かゝる次手は今は有まじき事なり 吹上見んと云コト供具せられける人々申出でて吹上へおはしけり 道より大風雨吹いてけふなくなりける さりととはて吹上に行きたりけれども見^{ミトコロ}処なきようにて社に輿かきすえて思ふに似ざりけり 能因が苗代水にせきくだせよとみて云伝へられたる物をも思ひて社に書付ける

天降る名を吹上の神ならば 雲晴のきて光あらはせ

西行

苗代にませき下されし天の川 とむにも神のこころなるべし

かく書付けたれば やがて西の風吹替て忽に雲晴てうらくと日成^{ヒナリ}にけり 末の世なれど志至りめる事にぞしるしあらたなる事を人人申つゝ信仰して吹上和歌浦思ふ様に見て販けり 眞砂山はいづこをさすとも定めがたし 此浜広く眞砂風に吹ちりて自然の山をなすこと多し 見るに今も砂山多し 藻塩草に出たり

名寄 あきかぜの吹上の浜の眞砂山 ほかに出て見たる月の影かな

爲家

吹上の峯は今の府城の山より南につゞきたる山なるべし

玉吟

秋の夜を吹上の峯のこがらしに 横雲しらぬ山の端の月

家隆

吹上の瀬戸は名所の諸書に無しといへども 本願寺の第三世宗昭法印の行状記慕^ボ販^キ絵^エ詞^シ伝と云へる書あり 其中にしるし曰、いづれの年記と云ことはさゞかならず 数寄の餘に数寄の餘に催されてかたへの人などにさそはれ伴うにも及ばず たゞ一身都邑を出でめる 駘^{タイ}にむちうちて紀州玉津島の明神へ参りて先づ法施をさゞげ後に詠歌に及びける 一人十首の和歌とてき

ゝ侍りし 其中に吹上の浦と題して

またや見む忘れもやらじ浦風の 吹上の瀬戸の秋のおもかげ 宗昭法印

吹上の小野はいづこをさしていふとも不知 紀ノ湊を即雄ノ水門と号す 今湊小野町と云所也
此所に吹上の社と蛭児神と一所に祀れり 其前に雄の芝とて旧蹟あり 近代碑文を作りて其上
に建つ 文に曰

海部郡宇治湊昔建ニ顯国ノ社ニ合ニ祭蛭児ノ神ニ余生ニ此郷ニ嘗聞此地蓋五瀬命雄詰而夢之処因

名ニ男之芝ニ 志波俗 用ニ芝宇一 社辺開阡陌也名曰ニ雄之町ニ 今福ニ 小野一 案ニ古事記ニ神武帝南方ニ廻幸到ニ紀

国男之水門ニ而詔負ニ賤奴之手ニ乎死 キト 爲ニ男建ニ而崩故号ニ其水門ニ謂ニ男ノ水門ニ也陵即在ニ紀
ノ国之竈山ニ也 口ニ之ニチ 日本紀大同小異也今以ニ古事記ニ爲拠云々

然らば吹上の湊は雄の湊の水門にてある事か 後人に尋ぬべし

新六帳 秋風の吹上の小野の葛かづら さぞうらがれて露こぼすらん 光俊

堀百 浜風の吹上げの小野の浅茅原 浪よるうらに玉ぞちりける 国倍

小江浦

吹上浦の南 鯛つじ山の麓にあり 今は埋もれて形ばかり残り 土人大浦と云 大浦小江浦
の和訓近し故に誤りたるか 夫木抄には小野浦と号す 但夫木抄の小野浦は小野湊の事か 後
人に尋ぬべし

正治百 紀の国やを江の浦わの友千鳥 ゆふかけてこそ声は聞ゆれ 経家

雑賀浦

雑賀浦は庄の名なれば広くして定がたし 今案ずるに雑賀所をさしていはゞ 和歌浦の西吹上
の南に雑賀崎といふ所あり是なん雑賀浦なるべし 此所に小島ニありて二児島と云也 権律師

夫木抄 紀の国や雑賀の浦の沖つ藻を 春の日ぐらしかづくあま

万葉六 雑賀野にそがひに見ゆる沖つ島清き渚に 赤人

全七 紀の国の雑賀の浦に出で見れば あまのともし火浪間より見ゆ 藤原卿

若浦

銘
那波遊円書ハ李梅溪の書

若浦又は鰯浦・明光浦・和歌浦に作る 若山の南一里計に有 昔は今の愛宕山・御坊山の辺より遠き瀉なりと見えたり 今時亀遊石・狢口・鶴立島等云フ所迄波打来ると見えたり 近代は田畑となりて天神の前より玉津島の南東ばかり入江を残したり 昔和歌村の北の辺に芦辺寺とて佛閣有しとなん 続日本紀云、登^レ山望^レ海此間最好^シ不^レ勞^ニ遠行^一足^ルニ以遊覽^一故^ニ鰯浦名爲^ニ明光浦^一 和歌の浦に東照宮有 元和庚申^{（一六二〇年）}年建立也 本社西の辺に薬師堂あり 是本地の眞身也と云 四月十七日に祭祀事あり又九月十七日臨時の祭あり 華表の銘曰、東昭掲^レ日^ヲ 華表劉^ス石^ヲ 維^レ明^ニ維堅万世垂^レ趾 又東照宮の西に菅神社あり 草創の時代分明ならず 廟門の額に高陽門と云へり 徒然草ノ抄に此天神の廟碑と署して出せり

古今序

和歌の浦に鹽みちくれば瀉をなみ 芦辺をさして田鶴鳴渡る

赤人

名寄

和歌の浦を松の葉ごしにながむれば 梢によする蟹の釣舟

寂蓮

万十二

和歌の浦に袖さへぬれて忘貝 拾へと妹は忘れなくに

作者不詳

玉津島

玉津島の社は藻塩草の五巻に出たり 今見るに和歌浦東の辺に有 本社一社拝殿庫藏のみありて外に一宇もなし 神社考曰、玉津島乃神は衣通姫也案^ニ日本紀允^一恭天皇之后忍坂大中姫の妹容姿絶妙無^レ比其艷色徹^レ衣而日光云是^ヲ以人号曰^ニ衣通赫姫^一云々 扱^{私は？}人皇二十代允恭天皇乃妃に忍坂大中姫とていまそかりける 其御妹に衣通姫と云人あり 容貌うつくしたぐひなかりしなかば 天皇召して是を愛し玉ふ 衣通姫藤原卿にまします時に天皇恋して

我せこが来べき宵なりさゝがにの 蜘蛛のおこなひかねてしるしも

とよみ給ひしを天皇ひそかに聞こしめし弥々感情ましゝ さて婦君の皇后是をきゝてふかく妬み玉ひて 衣通姫を愛してわれらを捨て玉はゞ 焼死なんと怒りますます故 天皇やすからぬ事におぼして 河内国茅渟^{チヌ}宮にうつしてたびゝ 御幸ましゝゝき 或説曰、衣通姫応神天皇の二派ノ皇子の女也と云々 和歌浦に跡を垂れ給ふ事は五十八代光孝天皇と申奉るは 別して和歌を好み玉ひし帝也 或時御惱ましゝければ御祈禱ありし曉に 赤き袴着けたる女房枕に立て云

立かへり又も此世に跡たれむ 名もおもしろき和歌の浦浪

と詠み侍り 天皇夢心に誰人にてましますぞとのたまへば 我は衣通姫也と答へ玉へしに寄て
(八八七年) 仁和三年九月十日に右大臣藤原隆行を勅使として和歌浦玉津島といはひ給ひて 信遍上人を以
て此浦に勧請ましゝき 古今序注等に見えたり 然れば玉津島和歌浦鎮座は光孝天皇の御宇
也 或人の云く、玉津島は本地釈迦如来也といへり 此説も立かへり又も此世に跡たれんとあ
る ゆゑに釈迦如来也と云ふか 玉津島の祭事は三月九日中の卯ノ日也 私曰、玉津島の神
光孝天皇の御宇に和歌浦に鎮座すと云事不審也 其故は続日本紀に聖武帝尊_ニ祭_{セシム}玉津島之神
明光浦之靈と云へり 聖武天皇は人皇第四十五代の帝光孝天皇は五十八代の帝也 光孝の御
宇より遙かに已前に玉津島乃神は有と見えたり 立かへりの歌光孝に告げられし故玉津島を始
めて立つると云ふ説不審の事也 然れば鎮座の年代不詳と心得べし

万六

汐干れば玉藻刈りつゝ神代より しかぞ尊き玉津島山

赤人

名寄

まつら船_楫とりまわし漕めぐれ 玉津島ほとゞぎすやま

相模

このほとゞぎす山とは今妹背山と云ふ所が覺束なく外に島なし 後人に尋ねべし

千五百

雲なきはこやの山の月影に 光をそふる玉津しまかな

はこやの山はいづことも定めがたし 名草山つゞきならんか 後人に尋ねべし

夫木抄

たとふべき方こそなけれ玉津島 照りかはせる住の江の月

慈鎮

この歌津国住吉をよみ入たり 住吉四所明神の一社は玉津島也 住吉玉津島和歌を守らせ玉へ
る御神なれば也 神社考曰、蟻通宇治と玉津島爲_ニ和歌ノ神_一也云々

若松原

和歌浦に今も松原も多し 邑老(村ノ老人)曰、東照宮の森・和歌浦の内に松原ありと云へり

続後拾遺

雪つもる若の松原ふりにけり 幾世経ぬらん玉津島もり

牛窟

玉津島南の江の辺に有相伝 昔高野明神の御輿此の窟へ渡御の事毎年これあるよし 其いはれ
は高野明神玉津島姫をおもひ 人にて御馬にて忍び通ひ玉ひけるを 丹生明神安からぬ事にお

ぼしめされければ 彼玉津島へ神馬を奉られし時は丹生明神の御前にてはくつばみの音を立さぬ事に侍る也と云々 此説高野大師行状記に見ゆ 但神輿を渡し奉る事今断絶す 岩屋の内に小社あり 公任公の家集に牛窟の事記されし歌に

あま人ののり渡りけん志るしにや 窟にあとをとゞめおきけん 四条大納言公任
海士のすむ浜のいはやのほとけには 浪の花をや折りてよすらん 少將
彼の岸のとほきをしりて岩陰^{かげ}に みかげを宿す水の月かな 公任

白木綿

浜中庄大崎村の南二丁計にあり 八雲御抄に紀伊国の名所とあれども証歌なし 此所の事なる
白神磯

浜中庄大崎浦の西五丁計にあり 或曰、有田郡栖原村の北施無畏寺の山を白神山と云 此山の前の浜を白上磯と云か いづれこれや覺束なし

万葉九 由良乃崎塩干にけらし白神の 磯の浦箕^みをあへて漕ぎどよむ

浦の初島

浜中庄椒村の西北八丁計海中に島あり土人地の島と云 東西四丁余南北八丁 此島の西三丁計に島有 土人沖ノ島と云ふ 東西五丁計南北六町余有 此二島を浦の初島と云也

新続古今 紀の国や沖つ浪間の雲はれて 雪ぞ残れり浦の初島 大納言重光
夫木抄 湊こす塩風寒し紀の国や 浦の初島雪やふりつゝ 權僧正公朝

紀 路 草 下

紀路草目録 下

有田郡

蕪坂 内崎山 須佐神社 千田村 櫻田 年魚市方^{アユチカタ} 有田川 糸我山
逆川 刈藻島 鷹島 肉背山

日高郡

白崎 由良湊 網代浦 興国寺 三穂窟 小池 道成寺 日高川
塩屋王子 塩屋ノ里 切目山 野島 阿胡根浦 上野 磐代 千里浜
千尋浜 三名部 鹿島

牟婁郡

秋津野 岩倉山 入国山 雲森 田辺 磯間浦 神島 白良浜
風莫浜 和深山 八上王寺 三栖山 岩田川 石不利川 高原 岩神
三越 癸心門 本宮 七越峯 熊野川 眞熊野湯 雲鳥 志古
小江川原 美もと 姨峯 古屋泊 新宮 神倉山 三船島 熊野村
水伝磯 徐福宮 三輪崎 佐野 松原 岡 秋津浦 鳴耶浜
哭沢森 渚杜 那智山 瀧 二ノ瀧 鳴瀧 玉ノ浦 離^レ小島
塩崎浦 有馬村 産田神社 花窟 慈恩寺 楯ヶ崎 三木浦 松本
錦浦

未考分

伊奈瀧 岩根岸 千草嶽 緒捨山 賀信土山 木方 袖島 手綱浜
曾許比浦 夏実浦 酢蛾島 大葉山 古畑 深山 八十美坂 乞許世山^{コセセ}

蟻戸渡
晒井

會野
奥島

篠宿
栗栖村觀音寺アリ
左奴山

屏風山

桧原嶺

的形浦

百重山

紀路草 卷下

△有田郡

順和名抄曰

吉備

湯笠ユガサ

英多

奈注

須佐

郷？

蕪坂

藤白山の南宮原の北にある熊野道中也 或人曰、白倉山とも云也 此所平家物語太平記等に載たり 南の坂の半服に大石あり 阿弥陀地蔵の像を彫刻せり 如何なる人の作と云事をしらず

内崎山

宮原より一里計川上に井ノ口村と云所あり 内崎山とて有田川の岸に四方はなれたる小山あり 昔明恵上人此山に法蔵寺を立 元亨釈書明恵伝云、承元二年（一二〇八年）還紀州於内崎山創伽藍云々 明恵上人者有田郡石垣郷吉原村之人也 父者湯淺權守平重国とて有田郡の郡司也 居城の跡今見るに湯淺の東にあり 母は同郡田殿庄伊藤宗重が女也 明恵有田郡十八ヶ寺を建立す也 栖原村施無畏寺・星尾村神光寺・井ノ口法蔵寺・鳥井戸村神谷寺・糸我野村成道寺・同村觀喜寺、伊伽絶寺・小豆島村淨妙寺也 又華嚴八会に準じて有田郡に卒都婆を建也 八會ノ卒都婆号す 具には明恵行状記とて施無畏寺にあり 其中に詳し 本伝釈書に出たり

須佐神社

保田ノ庄千田村乃西辺の山中にあり宮原より一里計川下也 糸我山につゞきたる山也 素戔鳴尊を祭ると云 神名帳曰、在田郡須佐神社一座三代実録云清和天皇貞観元年正月廿七日（八五九年）甲申奉授紀伊国從五位下須佐神社從五位上

千田村 櫻田 年魚市方

千田村は宮原の川下須佐神社の北の辺に有 松葉集に末勘と云へり 櫻田は八雲抄に紀伊国の名所と云へり 然るに知田の浦と年魚市方アユチガタと読合せ 櫻田とあゆちがたと読合れば 此三所同所と見へたり 此三所尋ね侍るにいくとも定めがたし 須佐の社辺に千田村と云所あれども海辺へは半里許も隔たれば覺束なし 因茲此辺の老人に尋侍れば 昔千田村の辺入江にて汐

満ち来りけれども今は海辺へ遠しと申侍故也 是私の儀なれば憚ありといへども 有田川の流
れの下にて歌の心にも叶ひ 又外にあゆちかた櫻田と云ふ所なき故爰に顯す 又糸我野山に続
き熊野路へ近けれど歌読ましき所にもあらず 殊に須佐の明神は古所にて神名帳にも載たれば
使有て捨てがたき故 爰に記し侍り 猶定がたし

新捨

時を得て千田村人乃幾千度 とれど尽せぬ早苗なるらん

時実

万三

櫻田へ田鶴鳴きわたるあゆちがた 汐干にけらし田鶴なき渡る

万七

嵐のかや吹きおろす櫻田の 苗代水を花にせきつゝ

光明峯寺

万代

あゆちかた塩干にけらし知田の浦に 朝漕ぐ舟も沖による見ゆ

無名

夫木

あゆちがた梶音すなり千田の江の 朝けの霧に片帆かくれて

覺性親王

夫木

あゆちがた朝こぐ舟のほのぐと 知田の浦辺に浪よする見ゆ

中務

有田川

此川の源は高野山より出て有田郡箕島と云所にて海に入也 其間廿七八里也 有田郡橘樹の多
き所也 此川の外慈鎮和尚のよませける松葉集に末勘と有^レ共 按ずるに順和名集に美濃の国
・豊後国に有田と云ふ所有といへども皆郡の名に非ず 當国は一郡の名にして而も大河有 故
に便有て捨てがたければ爰にあらず

世をいとふ心ばかりハ有田川 岩にくだけてすみぞ煩ふ

慈鎮

糸我山 里

熊野道中にあり有田川の辺也 北麓に糸我の里あり又王子の社有 西の方つゞき星尾山神光寺
とて明恵上人居住の寺有 又須佐神社神光寺の猶西にあり東北方に今来岡有 又王子八幡神社
あり伊都郡の今来峯の下に出せり

金葉

糸我山来る人もなき夕ぐれに こころぼそくもよぶ子鳥かな

前齊院尾張

夫木抄

春くれば糸我の山の山ざくら 風にみだれて花ぞちりける

鎌倉

一本夫木抄
名寄

五月雨は糸我の里のひくまゆ(繭)も たえんとすれやさらす日もなき 仲正

逆川

糸我山の南の麓吉川村の南に有 王子社有逆川の王子といふ 此川は西の方山ふさがりて水海
辺に出がたし 有田川に逆うて東へ流るゝ故さかさま川と云成べし

夫木抄

飛びちがふ夜の螢の光にぞ さかさま川の瀬とは志らるゝ

淳国

同 聞わたる名さへうらめし熊野路や 逆川の瀬をいかにせん

爲家

苅鷹嶋

又苅藻島と云 湯淺の西北に栖原村と云所あり 此海中にあり 又施無畏寺とて栖原村の北の
山中にあり明恵の居住せられし寺也 今見るに明恵筆など多し 此寺に居住の時度々此島へ渡
つて修行せられし事 明恵行状記とて二巻有 其中に島に渡る事あり 幾月もともに舟出シて
風にまかして島にわたる 凡夫のゐる島とて物さまあしき大島の常に海中をすみかとして漁
の釣する泊となり 海士の刈藻島と定められたれど 悟の知には則依正正得の観智とひらき
十身相正 作(?) 至(?) の成覺を唱ふ 他身悲恨同正得法也と云性相なれども せめて観智の心の底万
境隔なき前には

行状記

非相続の法にも得をあらせた きわ島を成身に成就せむとて

高弁上人

鷹島

湯淺浦(庄?)広浦の西の浦の海中にあり 此島へも明恵渡海せられて 求聞持の法子を修せられし
也 刈藻島の南に有 玉葉集に紀伊国鷹島と申所の石をとりて 文机のあたりに置いて侍りける
に書付ける

我去りて乃ちに忍ばん人なくば 飛て販りぬたかしまの土

高弁上人

肉ノ背山

有田郡と曰高郡の堺にあり熊野道中なり 此山の事は軍書等に出たり 元亨釈書曰、釈円善居
シテ 叡山東塔院ニ誦ニ法華經ニ赴ニ熊野肉背山ニ卒ス其後有ニ沙耆耆ニ彼処ニ行テ宿ス山中ニ中夜聞レ誦スル
ヲニ法華經ニ其声微妙ナリ 睿以爲ラク 先ニ有リ人宿 スト 天明無レ人傍ニ有ニ骸骨ニ支躰全連青苔遍ク鎖シテ似衣
服ニ髑髏口中有レ舌如ニ紅蓮ニ睿起テ拜ス骨人曰我ハ是台嶺東塔院某也至レ此而死ス生平起ニ堅誓ニ誦 セント
ニ法華經六万部ニ存日纔ニ半数而夭ス願力不 シテ 拔住 メリレ此ニ尚誦 スルレ經耳云々 鹿ヶ背山にねたる夜

鹿の声を聞て

庵主家集 うかりけんつまのゆかりに背の山を 名を尋ねてや鹿もなくらん 増基法師

△日高郡

順和名曰 財部 清水 内原 石渚 南部 全戸

白崎

衣奈ノ庄の南北に七町に有 衣奈八幡の縁起に岩守楊柳観音は形を顕し白崎(現)におはしますと也
今も佛の形に似たる石有 衣奈の八幡とて衣奈浦の東南二丁計有 日本書紀曰、神功皇后南
詣ニ紀伊国ニ会ニ太子於ニ紀伊国日高ニと有此所か 昔は此所海士郡今は日高郡也

万葉

白崎は幸サキありまで大船に 眞マカシ梶しぬき又舁りこん

無名

由良湊

由良の湊は肉ノ背山の西の尾崎の海岸也 此所は入江一里計有て吹井浦・紙屋浦・江ノ駒浦・
網代浦・横浜浦・阿戸浦・柏浦など云所あり 藻塩草に由良湊海部に有て云々今は日高郡也
西行撰集抄に此浦の漁人亀を殺して発心したる事を戴侍る 太平記平家物語など軍書に載たり
吹井浦は由良の湊の内に有り

建保百首

櫻さく山には春もなかりけり 由良の湊のあけぼの空

順徳院

夫木抄

濱清き由良の湊に鳴く千鳥 よぶ(夜舟)ねやのぼる声さわぐ也

小待從

同

月寒き由良の湊やふけぬらん 遠方人オチカダの声ぞ残れる

後九条

万葉七

妹がため玉を拾ふと紀の国の由良の御崎に此日くらしつ

無名

同九

朝びらきこき出て我はゆらの崎 釣する蟹を見て舁りこん

同

健保

浪かへる由良の御崎を舂みれば 露の袖につゝむしら玉

忠定

網代浦

此浦由良の湊の中に 有 名所部分に見えずといへども万葉集に載たり 糸我へは三里程有

足代過ぎて糸我の山のさくら花 散らずもあらなん舁り来るまで

【足代はアジロに非ず アデ即有諦ナルベシ 有田郡二属ス】

興国寺

由良湊の中にあり又は鷲峯山西方寺と号す 法燈禪師居住の寺也 元亨釈書六卷曰、釈覺心性常澄氏信州神林縣ノ人十九ニシテ薙染建長之初泛レ船踏ニ宗域（二五〇年頃）同六年皈ニ博多（二五四年）弘安四年文応上皇詔居ラシムニ城東勝林寺一以ヘラク帝里繁喧忤ヲニ干禪宴ニ不レ幾（二九一年）潜ニ回ルニ紀之旧院一鷲峯元ト多ニ妖魅ニ有ニ涉竟者一心遭ニ感乱一必居テ此一屢見ニ怪異一覺心心一々ニ降攝ス 正応四年晴天大雷墜ニ鷲峯之東嶂一声聞ニ四十里一諸徒怪テ至ニ雷所一有ニ一顆宝珠一覺心心乃チ埋ニ珠鎮山門一智始心遊ニ鷲峯一樂ニ其絶勝一營ニ構梵宇一名ヲ曰ニ西方寺一樓コト四十余歳化被ニ南紀一詣ニ熊野一者取ニ路ヲ鷲峯一必礼謁志 不レ則爲ニ虚行一（二九八年）永仁六年十月十三日蛻然トシテ而逝壽九十二臘七十四勅諡ニ法燈禪師一已上畧出 覺心入宗之時持来せられし 寺門額曰、関南第一禪林天界山住宗勅書已上 又鷲峯と云へる山号のその額は裏書竹友七十七歳書之云々 又此寺に覺心所持の宝物等数多有 唐絵観音・羅漢・佛舍利・鈴・蓮

華井に鴨の唐絵・筆者徳□[?] 覺心影像是は覺惠筆也

【覺心の影像には寧一山の賛あり】

小池

此名所藻塩草第五卷に出て紀州名所とす 然れども小池といふ所なし 案ずるに由良湊より三尾の方へ行く道に小池筋と云所あり 此所か猶尋べし

藻塩 いかにして梢の隙をもとめつゝ 小池にこよひ月の澄むらむ 読人不知

三穂窟

三尾浦の東南二十五丁計海辺に有り 窟中に観音の石像あり 熊野路を行に日高川塩屋浦より西の海辺に長さ一里計りの松原有 土人和田の松原と号す 此松原の西の際に三穂の窟有

名寄 紀の国や三穂の窟もさすがなほ 風こそふるき松に（答ふ）こたふれ 定円法師

万葉三 はたすゝきくめのわくこがいましける 三穂の窟は見れどあかぬも 博通法師

道成寺

矢田の庄土生村に有天音山楊柳院と号す 本尊十一面観音也 縁起二卷有文武天皇大宝年中に(七〇一年頃)紀ノ道成と云ふものに建立と云ふ 釣鐘の事は延長六年八月也 安珍法師は生国奥州白河の者なりといへり 元亨釈書曰、安珍急走^キ入^テ寺名ニ道成寺云々 奥に將軍義昭公由良の寺に來駕時ニ當地に参詣 此縁起を披見し玉ひて判を顕し置れしと也

【義昭公ハ道成寺ニ來ルニ非ズ 興国寺ニ於テ此縁起ヲ披見セラレシ也】

日高川

熊野道也 肉ヶ背山を過て原谷と云里あり原谷王子社あり 次に萩原と云里あり此所に王子社あり高家王子と号す 源平盛衰記曰、權亮維盛は蕪坂を下り鹿ヶ瀬山を越過て高家の王子を伏拜み日数漸く重るほどに千里の浜も近付ヶ里と云々 次に富安皇子の社あり次に小松原・園村など云所あり 次に日高川なり此川和州堺より出て塩屋浦にて海に入也 川の流三十里計り也 草根集 さしのぼる日高の川もとけやらで 氷をくたく紀路の旅人 徹書記

塩屋王子 里

日高川を越て天里の里あり次に塩屋浦あり 此浦の沖に島あり里人鯉島と号す 王子社は塩屋村南の辺に有 別に土橋あり

千載集 思ふことくみてかなふる神なれば 塩屋にあとをたるゝなりけり 後三条内大臣 名寄 こととはん塩屋の里にすむあまも わがごとからきものや思うと 中務親王

野島 阿胡根浦

塩屋浦の南に野島の里あり此浦を阿胡根浦と号す 此浦は百千の貝集る所也 浦に井戸あり里人祓井と云也

万葉集

我欲りし野島^{ヌシマ}は見せつ底ふかき 阿胡根の浦の玉ぞひろはん

万代

よしさらば思ひもたゝぬ敷島や あこねのうらのたまゝもなし

上野

上野は野島の南に有て長き野原也 熊野道中也 熊野へ詣ける時上野にてよみ侍りける

むかし見し野原は里となりにけり 数そふ民のどぞ志らなく

入道前
太政大臣

隠し題 三名部 上野

夫木抄 みくまのゝ浦ふく風をみなへし 下葉はうへへのものところなれ 寂然

切目山

上野を過て津井の濱・印南浦あり 次に切目坂有・切目浦有 熊野道中にて海辺也 切目山は里より一里東北の方也 切目村北の方に王子の社あり切目の王子と号す 金剛童子也 昔大塔宮熊野落の時切目の王子に宿し玉ひしに示現によりて 是より熊野へ行玉はずして十津川乃方二越え玉ひし事太平記に見えたり

万葉集十二 きりめ山行かふ道の朝かすみ ほのかにだにや妹にあはざらん

夫木抄 見渡せば切目の山もかすみつゝ 秋津の里は春めきにけり

後鳥羽院熊野御幸の時切目王子の御會

遠山落葉 切目山をちの紅葉ばかりはてゝ なほ色のこす阿けの瑞籠タマガキ 右近衛大將

磐代

結松 王子社 野中清水 森 尾上 岡 岸 浜

切目を過て切目川あり次に岩代也 結松今は絶てなし 西岩代に今結松と号するあり 岩代結松は(六四五六四年)三十七代孝徳天皇の太子有馬の王子と申 今(在イマ)ぞかりける御門の位を去り玉はんとしける時 有馬の王子の位をたもつましきけしきを見しり玉ひて ゆずり玉はざりければ 世を恨てうかれありき玉ひ 岩代と云所にて松が枝を結び

万葉三 岩代の浜松ヶ枝を引むすび まさきくあらば又販りこん 有馬王子

岩代王子は岩代村海浜に有 土人浜の王子と号す 新古今に熊野へ詣で侍りしに 岩代の王子に人々の名など書付させてしばし侍りしに 拜殿の長押に書付侍る

岩代の神も知るらん志るべせよ 頼むうき世の夢の行末 読人不知

野中の清水は西岩代の村田畦の中に有 熊野に行には左の方也 土人柳の水と号す 是なん野中の清水のことか

岩代の野中の清水むすべども 恋をばけたぬものぞありれる

岩代ノ森は東岩代の中に有 縦二十五六間横貳拾間の森也 中に八幡の宮有 是岩代の森か
外に森と云ふべき物なし

後拾遺 岩代の森のいはじとおもへども 雲にぬるゝ身をいかにせん 惠発法師

岩代の尾ノ上は岩代村の南辺に有 岡は村の中に有

後拾遺 岩代の尾ノ上の風に年かれど 松のみとりはかはらざけり 資仲

堀百 世の中はつねにやはある岩代の 尾の上に立てる松をみるにも 仲実

万葉一 君が代も我が世も志れやいはしろの 岡のかや根をいざや結ばん

万葉集 類聚 さゝ竹の幾世の霜かしはしろの 岡のかや根にむすぼるゝらん 良基

岩代の岸は岩代村の中に有 長四町幅三十間許あり 但王子の近岸に高き岸あり是等を云か

宝治百書 岩代の岸の松浪年なりて 同じみどりに結ぶ苔かな 後九条内大臣

千里濱 千尋浜

岩代の南辺より南部迄の間（平家物語十、廿八丁）里半許の処を云也 又千尋の浜とも云か外に千尋の浜なし 王子

社有 昔シ花山院御出家の本意（ホイ）あり しみじう行はせ修行せさせ玉はぬ所なく されば熊野道

に千里浜と云所にて御なこちそこなはせ給ひて 蟹の塩焼烟を見給ひて心ぼそくは覺しけん

旅の空夜半の煙とのぼりなば あまのもしほ火焼かとや見む

とよませ玉ひととかや大鏡に載たり 又清和天皇貞觀八年三月廿三日に右大臣良相が百花亭行

幸の時 紀伊国の千里の浜の石を取のぼされし事伊勢物語の註に見えたり 太平記曰、

元弘元年七月三日大地震有て紀伊国千里ノ浜廿四丁干瀉と成て俄に陸に成りけると云々

藻塩草（夫木抄） 末とほき千里の浜に日はくれて 秋風おくる岩代の松

題林 雲きゆる千里の浜の月影は 空にしられてふらぬ白雲 読人不知（寂恵法師） 定家

【瀧尻王子御会の時の哥】

拾遺 万代をかぞへんものは紀の国の 千尋の浜の眞砂なりけり 元輔

【廿一代集第三】

三名部 鹿島

岩代の南に三名部浦あり十町計沖に島有 島の中に小社あり是なん鹿島と云也 仙覺抄十巻に

も南部紀国に入り

万葉九

三名部浦塩みちそね鹿島なる 釣する蟹をみてかへりこん

明玉

浦人や浪間をわけてきの国の みなべの瀉に磯菜つむらん

大僧正玄信

名寄

鹿島へはあそびにたやはつきぬらん たはむれにてもおもひかけねど 俊頼

△牟婁郡

順和名曰

丘田オカ(岡田)

牟婁(無呂)

栗栖クルス

三前ミサキ

神戸カンベ

又室郡に作る 南部の南に堺浦と云あり 日高郡と室郡の堺に有故也 堺浦は紀州の名所也と云 藻塩草五巻に出たり 然れども古歌に出たるは泉州の堺なるべし

玉葉

待侘ぬいつかはここに紀の国や むろのこほりははるかなれども 熊野權現

大和物語

紀の国のむろのこほりに行ながら 君となすまのなきぞかなしき 兵庫尼

堺浦を過ぎて芳養浦ヘヤと云所あり 此処に王子の宮有

秋津野

田辺江川の上十町計に秋津庄有 秋津野は下秋津村東南に方八町計の野あり 今は田畠と成なり 岩倉山は下秋津の東北山上に禪宗の寺あり宝満寺と号す 此所の歌山城の岩倉に入たり 人国山は秋津村の西十丁部に有 里人誤りて人目山と云 又此所を見渡スに高尾山龍神山と云高山あり

万葉七

常ならぬ人国山の秋津野に 杜若をし夢にみるかも

同

岩倉乃小野ゆ秋津に立ち渡る 雲にも志もあれや時をし待たん

雲森

下秋津村の東北に有 此名所松葉集等に末レ勘と有れ共 秋津野に雲を詠来れば故ありてここに入侍る

夫木抄

村雨の今朝もゆきゝの雲の森 幾度秋の梢そむらむ

田辺

此所名所には非ず 諸書に載りたり鶏合權現と云有 熊野十二所權現を勧請すと也 社の作り
様本宮に等し 昔源平合戦の時熊野別當湛増 神前にて二鶏を合せて勝負をはかりし 事平家
物語に載たり 今見るに本社の北二丁計に若宮と云有 是湛増父子三人を祭りしと也 又武藏
坊弁慶は湛増が子にて此処に誕生したると也 今土人の説に弁慶松と号する有 又産湯の水と
云有 又西ノ谷村の南浜二丁計の所を潮垢離と号す 昔時崇仁天皇熊野御幸の時此海浜にて海
水を浴させ玉ひしよりかく云也と云々 又眞砂庄司とて昔有りし 此娘大蛇となりて安珍法師
を殺したりとなん 今に庄司が子孫あり 又後鳥羽院熊野御幸の時頓宮の跡有 今民家と成り
侍る 又西ノ谷村の北東にもあり 土人御所の谷と号す 今は田畑と成る

磯間浦

田辺に宿村の南神子ミコ乃浜つゞに有 神島此浜の沖一里計に有かしまとも申也 又此浦乃見渡に
形見浦と云所あり 勿論妹が島も海中に有

万葉集十五 月よみの光を清み 神島の磯間の浦に船出すわれは

建保百 神島や磯間の浦に蟹の刈る 藻に住む虫の身を恨みつゝ

順徳院

白良浜

湯崎鉛山ハ瀬戸の間に有 此浦の眞砂遠く望むには雪の如し 藻塩草十四卷にましららの浜こ
とに白也と云々 又勢州に白良浜と云所あり 催馬楽抄に白良浜紀伊国と伊勢国との境なりと
いへり 松葉抄に紀伊の白良伊勢の白良ニヶ所に出せり 藻塩草も同じ志湯は白良浜に有

家集

君が代の数ともとらん紀の国の 白良の浜につめる眞砂を

兼盛

ましらゝのはまの志湯浦さびて 今はみゆきの影もうつらず

仲実

風莫浜

田辺と瀬戸の間につなしらずと云入江あり是なん風莫カゲの浜成るべし 此入江は山陰カゲの間なれば
大風の時にても此浦に船を入ぬれば 碇をもおろさず綱に及ばざれ綱不知と云 かざなぎの
浜といふに心よく叶し

万葉九

かざなぎの浜の白浪いたづらに ここにより来る見る人なしに

長忌寸

和深山

熊野大辺路の海浜也 那智の方より田辺の方に来る道なり 和深星野浦とて有り 此海辺にて
は高山なり 土人「二王子山」とも風折山ともいへり

名寄

身のうさを思ふなみだは和深山 なげきにかたる時雨なりけり

八上王子

八上王子は三栖山の麓に有 今は熊野道替りし故此王子の方へは通らず 田辺を過て三栖の方
へ行ば右に見ゆる山を云也 八上王子と三栖と其山を隔てゝ今の道中よりは見がたし 八上王
子は九十九王子の一つ也 西行家集第一二曰、熊野へ参り侍りしに八上王子の花盛りにて面白
かりければやしるに書付侍りし

待来つる八上の櫻咲きにけり あらくおろすな三栖の山風 西行法師

岩田川（平家物語十）

【岩田川は中辺地の道中にあり】

熊野道中大辺地越岩田村の東八丁計に川あり源は栗栖川庄より出る也 川の近辺に岩田の王子
の社有

御集

岩田川谷の雲間にむら消えて とゞむる駒の声もほのかに

後鳥羽院

愚草

染めし秋を暮れぬと誰か岩田川 また浪こゆる山姫の袖

定家

六帖

岩田川いはさえさはぐゆく川の下は崩れて思ふころかな

兼輔

西行家集に云夏熊野へ参り侍りしに 岩田と申所に涼て下向し侍りしに付て京納上人の許に
遣し侍る

松が根の岩田の岸のゆふすゞみ 君があれなどおもほゆるなれ 西行

源平盛衰記曰、小松内大臣岩田川に着給ひて夏のことなれば涼み玉ふに 権亮少將已下公達二
三人河水に浴し 戯れて登り給ぬと云々 又曰、三位中將入道は日数経ぬれば岩田川に着給ふ
一度此川を渡るものは無始の罪業滅するなれば 今愛執煩惱の垢も雪ぎつらんとたのめしく
仰せられて

岩田川誓の舟に棹さして 志づむ我身もうかびぬるかな

石不利川

栗栖川の庄芝村の川下岩田川の上也 瀧尻王子の辺にて岩田川にて合す 是も今は熊野道中にあらず 但し芝村と云は熊野道中也 田辺三栖を過て潮見峠を越てあなたに芝村と云所あり 藻塩草に石伏川に作るは誤なるべし

三熊野や石ぶり川のはやくより ねがひをみつの社なりけり

高原

栗栖川の庄芝村の東廿四丁にあり十丈坂とて大山あり 此山の中に大門の王子・高原の王子・高原の王子とて有 後鳥羽院熊野御幸の時瀧尻王子にて和歌會に峯月照松と云ふ題にて

高原や峯より出づる月影は ちとせの松を照らすなりけり 因幡守通方

岩神 三越

岩神・三越とて二つの坂あり 俗に夫婦坂と云へるは十丈坂を過て熊野に行ハ近露と云里あり 此所に近露川と云大河あり 又王子の社あり近露の王子と合す 此社辺に芝あり昔御幸の時の頓宮の跡なりと云々 それより熊野の方に行ハ比曾原王子の社あり 次に野中村と云里あり 此所に接櫻王子とて社あり 次に岩神坂なり 是にも王子の社有岩神王子と号す 此岩神坂を下りて湯川と云里あり それを過て三越と云坂あり何れも難所なり 藻塩草には三越を御越に作る 後頼家集に云、中宮亮仲実熊野に詣りけるに遣はし侍る

雲のいる三越岩神越えん日も そふるころをかくれぞと思ふ

発心門

見越を過て五十丁計に発心門法王子とて数株の杉のみありて今社なし 此所殺生汚穢を制せらる 昔発心門とて有シ由 是より本宮迄二里也 昔此所に南無坊と云人あり今その跡あり 又庵の屋敷とも云へり 定家明月記云、十五日午時許に発心門に着南無坊が宅に宿して

惠日光前懺罪根 大慈道上発心門

南山月下結縁力 西刹雲中弔旅魂

源平盛衰記曰、三位中將入道は高原の峯ふく嵐にまかせ見越岩神を越ゆるに 尚忉利の空も遠

からず発心門に着玉ふと云々

千載集 うれしくも神の誓をしるべにて 心をおこす門に入ぬる

權中納言経房

本宮

古今皇代圖曰、崇仁天皇六十五年始建ニ熊野本宮ニ矣神代卷曰伊弉冉尊生ニ火神一時被レ灼而神退去矣故葬ニ紀伊国熊野之有馬村ニ又曰伊弉諾尊與ニ伊弉冉尊ニ盟レ之所レ唾^{スル}之神^ヲ号^{シテ}曰ニ速玉之男ニ次掃^{ハラヒ}之神号ニ泉津事解之男ニ凡ニ神^{マス}矣 神名帳曰、紀伊国牟婁郡速玉神社今按速玉男事解男伊弉冉尊是熊野三所權現也矣 社家旧説曰、伊弉冉尊御垂跡者熊南効自ニ有馬村ニ奉^レ還ニ音奈志^無

【名所圖會熊野編二 高川原トセリ 脱セルカ】

庄之川^{高河原}原ニ其後又奉^レ祭ニ祀大字原ニ今之本宮是也 私曰、熊野十二所權現とは三所權現・五所王子と四所明神と合せて十二所權現也 三所權現とは一證誠殿伊弉冉尊にして本地阿弥陀如来當宮之本社也 二西ノ御前結宮事解男は千手觀音也 三中ノ御前速玉宮は藥師如来也 是を三所權現と号す 五所王子とは、一若宮王子十一面觀音 二禪師宮は地藏菩薩 三児宮は如意輪觀音 四聖宮は龍樹菩薩 五子守宮は聖觀音也 是五所王子と号す 四所明神は^{十方宮}一^一方宮は普賢

文殊也二米持金剛八毘沙門天也 三飛行夜叉は不動明王也 四勧請十五所は^社釈迦如来也 是を四所明神と号す 傳二曰、一證誠殿は国常立尊国挾槌尊斟淳尊 二結宮は伊弉冉尊事解男尊【書写の時 六・七 一行脱落したか】

三速玉宮は伊弉諾尊早玉尊也 四若一王子は天照大神 五禪師也宮ハ泥土煮尊砂土煮尊 八

二子守は伊弉諾尊伊弉冉尊也 ^一方宮者^{天照大神}正哉五勝尊 十二勧請十五所は瓊々杵尊 十一ニ飛行夜叉

ハ彦火々出見尊 十二ニ米持金剛ハ不合尊也 本地をとる事は上に同じ 神社考曰、社家者説ニ熊野權現とは自ニ天竺ニ飛来之神也云々 今^此説を考ふるに伝曰、熊野權現と云は元は西天摩訶陀国の大王慈悲大顯王也 然るに本国を恨ミ玉ふ事有て 崇神天皇位元年秋八月に遙に西天より五ノ劔を東に庖て我が有縁の地に止るべしと誓ひ玉ひしに 一ッハ紀伊国牟婁郡に止り 一ッハ淡路島瑜鶴羽^{ユツルハ}の峯に止り 一ッは下野国日光山に止り 一ッは出羽国石城郡^{イワキ}に止まれり

一ツは豊前国彦山に止まれり 彼彦山は天降りし給ひし時は其形八角の水精也 其尺三尺六寸也 靈驗九州に晋く万人歩を運びずといふことなし 今正^ウ熊野權現と顯れ玉ふ 紀伊国岩田川の辺に獨りの獵師あり 其名を阿刀の千世といふ 山に入つて狩しけるに熊を射たり 血を尋ね跡を求めて行く程に一つの楠の下に至れり 其時具したりける犬梢を見上げて頻りに吠えければ 千世木の上を見るに三の月輪あり 千世怪ミをなし問ふて曰、何故にか空を離れて梢にかゝるや 且又何ぞ三ッあるや 天変か光物か甚覺束なしと云ふ 其時權現託宣して曰、天変にあらず光物にあらず 東土の衆生を救はんが爲に 西天佛生国より遙に此朝に來れり 乍チ熊野權現と顯れんと思ふ 汝速に社檀を作つて我を崇むべしと示し給ひければ 千世忽に渴仰の思をなし 殊に皈依の心をいたして 即ち假殿を作て勸請し奉けりと云々 熊野本宮・新宮は正一位也 具ニは三代実録の如し 本宮は若山より三十二里に有 三山共に社辰巳ノ方に向く也 本宮社の造り様は證誠殿と若一王子と一社一樣也 早玉の宮と結ノ宮は兩社一棟なり 禪師宮・児ノ宮・聖宮・子守宮は四社一棟也 一^{ウシロ}萬宮 勸請十五所飛行夜叉米持金剛は四社一棟也 社の四方大河流て後に長山列れり 音無川岩田川大峯川此社の前にて流合ふ故巴が淵と号す 社の前に拝殿あり十三間に十八間也 廻廊・鐘樓・三門皆滅したる也 外に満山宮是は山内山 外の諸神を勸請したる社也 瀬織津姫社^(瀬織津姫社ト云)今は社なし榊壹株あり 祓所王子并天神ノ社本宮の北一里半許にあり 天神ハ^(明姫命?)明ル玉ノ尊なり本宮の末社と云へり 底海神社本宮の東八町七越の峯の東六七町の山越にあり神名帳に^(アキ)海神三座と云 是か

家集

うきことも山道志らず尋こし 我みくまのに入りやしなまし

信明

夫木抄

三くまのゝ山路に名のる郭公 神も初音やうれしかるらん

後鳥羽院

本宮の北辺に音無の家地とてあり いかなる人のすめるといふことしらず 但し御幸の時の宮殿の跡か 昔此所に音無しの梅とて八重の白梅あり 沙石集曰、後嵯峨院法王み熊野に詣デ有ける時伊勢の夫の中に本宮の音無川と云所に梅の盛りなるを見て読る

音なしに咲そめにける梅の花に ほはざりせばいかでしらまし

クダシブミ

此歌夫が歌には秀歌なりとて百姓になりけるに 彼所昔公事一向御免之永代の御下文給りて

けり

音無川

瀧里

密語橋ササヤキ

雄ノ山

音無川は本宮に有 源は本宮三越山より出て小森の里一本の松の里を経て 本宮權現の前にて大峯川に入也 瀧は上の瀧とて大山の上の有 是を雄ノ山と云か 中の瀧は小森村に有下の瀧は本宮の北一里計二あり 雄山ハ土人おぼろ山と云 音無の里は本宮の事也 さゝやき橋は本宮中に有 音無川は本宮の里の後より流出て權現の西を流るる川を云也

夫木抄

はるぐとさかしき峯をわけ過てすぎ 音無川をけふみつるかな

後鳥羽院

同「夫木抄」

名寄「夫木抄」

音なし乃里の秋風夜を寒み 忍びに人や衣うつらん

親民部卿高家宗

懷中名寄又夫木

熊のなる音なし川に渡さばや さゝやき橋のしのびくに

能因法師

後拾遺集雜四 熊野へ参りて明日出デなんとし侍りけるに 人々しばしはさふらひなんや 神もゆるし給へしなどいひ侍りけるほどに 音無川のほとりにかしら白き鳥の侍りければよめる

山からすかしらも白くなりけり 我かへるべき時や来ぬらん

増基法師

七越峯

本宮權現より東八町計二有里人七がしらの峯と云也 山家集云、熊野に参けるに七越の峯の月をみてよめる

立のぼる月のあかりに雲消えて 光かさぬる七越の峯

西行

眞熊野湯

本宮の西五町計に温湯あり是を眞熊野湯と号す 正月六日四月十五日には于レ今本宮の社家人共に湯垢離をとると也 薬師堂一宇有堂の傍に三所權現の社并東光寺といへる佛閣あり又宝塔一宇あり 當山の湯は極めて熱湯なる故水を合して用ひ侍る日本無双清湧湯也 此所いずれの時代に開闢ビヤクすると云事を知らず 又本宮より湯の峯の方へゆき侍る道の傍に清淨水あり關伽井と号す 薬師堂壱宇有本山當山の山伏峯入りの節 此別當長床坊出て笈フツを受取ると也 其外あれども皆俗説にいひ習はしたる事のみにして 何レの書に見えたる事もなければ不記

堀河院初夜百首雜俊頼朝臣の歌に

堀川後 三くまのゝ湯垢離のまろのをさす棹も ひろひ行くらしかへていとなし

熊野川

本宮より新宮に下る九里八町の川を云ふなり 川漲つて極めて早く山高^クして岩石屏風を立てたるが如し 川岸に躑躅多し 布川瀧三重瀧葵瀧飛雪瀧白糸瀧小口志古など云所あり 其外色々又湊など名アル所あれど皆俗説なれば不記

新古今

熊野川くだす早瀨の水馴^{ミナシガラ}竿 さすが見なれぬ浪のかよひ路 太上天皇

続古今

熊野川瀬きりに出す杉船の やなみに袖のぬれにけるかな 全

雲鳥

本宮より那智に越ゆる山道 請川と云所より小口と云所まで三里半計を雲鳥と号す 又小口村より那智山まで三里半計を大雲鳥と号す 何れも極めて難所也 志古村は楊枝村の西南熊野川の南辺に有 小雲取山とも志古山とも云也 小口村は大雲鳥小雲鳥の中間にあり此小口村より熊野川へ落る川を小口川原と云也

山家集

雲鳥や志たの山路はさておきつ 小口川原のさひかぬと

西行

美毛登

本宮より熊野川四里半計下りて左の方に美毛登村あり右に小口川原あり 此所より大雲鳥の山も見ゆる也 みもとの明神とて小社有 風雅集云、後白河院熊野御幸三十三度に成ける時みもとと云所にて告させ給けるとなん

うろよりもむろに入ぬる道なれば これぞ佛の見もと成べき

權現

姨嶺

藻塩草に紀伊国に有といへり 高野の方より熊野乃方へ越すに姨が嶺と云所有といへども 我いまだ此所を見ざれば方角しるしがたし 西行家集上曰、姨ヶ嶺と云所を見渡されし思なしにや月ことに見え侍りしかば

おぼすては信濃ならねどいづくにも 月すむ嶺の名にこそありけり 西行

古屋泊

類字并に松葉集に紀の国の名所と云へり 案ずるに大峯より熊野の方へ越ゆる道に有ルと見えたり 方角慥ならず 風雅集云、大峯の古屋の泊にて

涙のみ古屋の軒の板びさし もりくる月ぞ袖にくもれる

僧正遍昭

新宮

古今皇代圖曰、景行天皇五十八年建熊野新宮矣 新宮は本宮の東南九里八町那智山の東北四里半許にあり 海辺にして新宮の湊と号す 此辺より南海の沖には山もなく島もなく天地一つに出て日月海中より出る也 本社速玉尊は本地薬師如来事解尊は本地千手観音也 此二社一棟両社也 證誠殿伊弉冉尊ハ本地阿弥陀如来也 若一皇子天照太神十一面観音也 此二社両社一棟也

禪師宮児宮聖宮子守宮 一万宮 十萬宮

勸請十五所飛行夜叉米持金剛氏八社一棟八社也 神躰本地本宮に

ひとしければ 今ここにあらはさず是を新宮十二所權現と号す 満山宮あり本宮にひとし 其外輪藏阿弥陀堂神樂屋四脚門護摩堂東門鐘樓等あり 飛鳥神社は速玉尊を祀ると也 此社の東に小社あり新宮の地主を勸請すと云へり 宮戸神社新宮中熊村の東北一町許にあり泉守道神を祀るといへり 浜王子社下熊野村の南三町計に有 矢倉神社(熊野樟櫨日命を祀ル)新宮の中に有

【熊野獨參記二泉道神社訛リトアリ即日本書紀の黄泉道守命ヲ祀レル也】

其外有といへども今略之

天下る神やねがひをみつほしの 湊にちかき千木の片そき

中原師光

神藏山

新宮の東南二町計に有 社家者曰、天照大神と倉下二神を祭ると也 石畳六百許のぼりて上に一字の堂あり地蔵を安置すといへり 是を神藏權現と号す 外に社なし 是より南海を見るに小島一つも見えず 日月海中より出て海中に入る 故に熊野浦は日本無双の荒海なれば渡海の人の難所とす 定家卿の熊野御幸に供奉せられし時の歌に「わざつみもひとつに見ゆる天の戸」と読まれしも ことわりなりと覚え侍る

続古今 三熊野の神倉山の石だたみ のぼりはてゝも猶いのるかな 入道前太政大臣

三船島

新宮本社の西六町計熊野川の内にあり 毎年九月十六日新宮祭礼の時神輿を船に乗せて此島を
順る也 故に御舟島と号す

藻塩草 三熊野の浦わに見ゆる御船島 神のみさきに漕ぎめぐりけりるなり

夫木抄 そのこの瀬に誰が棹さして御船島 神のとまりにことよさ女けん いほ主

増基法師

熊野村

新宮に上熊野・中熊野・下熊野と云所あり 今の新宮も昔は熊野村の内たりといへども 景行
天皇の五十八年に新宮の社を建玉ひし後は新宮と号す 牟婁郡は皆熊野と云ふも此熊野村より
出たるなるべし 諸書に熊野村と云ふは新宮の熊野なるべし 元亨釈書廿九日、紀州牟婁郡熊
野村有永興法師は智行兼備有ニ一比丘ニ從^フ與^ニ一日別居後經^ニ二年熊野村之人入^レ山伐^レ木聞^ニ經音
ニ有^ニ一ノ骸骨ニ興見悲泣其舌赤^カ鮮^{カシ}』 下熊野村に十郎藏人住居の跡有 高倉ノ君謀叛之時令旨
ノ御使誰か勤むべきと仰せければ 三位入道申けるは外人は憚りあるべし 新宮十郎義盛折節
在京し侍れば 被^レ召て使節を仰含らるべしと云 其時無官にてはあしかるべしとて即座ニ藏
人になさりけり 義盛を改^メ行家と名乗りけるとぞ 此事盛衰記に載たり

水傳城

新宮の湊にあり土人誤りて水づきと云 熊野川の下也 神藏山より見ゆる所也 今見るに城櫓
あり其辺は海の方と云也

万葉一 水つての磯のうらわの岩つゝじ もえさく道を又も見んかも 舍人王

夫木抄 水つての磯間のつゝじ咲にけり 阿まのいさり火夜とやは見る 衣笠

徐福社

新宮權現の辺に蓬來山と号する川岸也 此蓬來山に小社あり是なん徐福が社也 又田疇の中に
塚あり土人徐福塚と号す 惟肖東海瓊集曰、世ニ伝^フ秦徐市上ニ書^ヲ始皇一請^下与^ニ童女五百人ニ入^レ

海求^中三神山不死藥^上而得^ニ海島^一遂留不^レ還即^チ吾^ガ朝尾州熱田神祠是也 或曰^ニ紀州熊野^一矣沙門

中津^{号ニ絶海一}入^レ明明太祖問^ニ徐福事^一津答^{フルニ}之以^{テス}詩曰

熊野峯前徐福祠 満山藥草而餘肥
祇^只今海上波濤穩 万里好風須早飯

太祖和曰

熊野峯前血食祠 松根琥珀世応肥
昔^{當年}時徐福求仙藥 直到如今竟不飯

私曰、皇七代孝靈天皇乃御宇に日本ニ来る異朝にては始皇帝ノ時也 又人皇百代後円融院の御宇に日本ノ禪宗絶海法師大明に渡りしに^(一三七六年)太祖皇帝徐福が事を問給ひぬ 絶海法師詩を以て答へしに皇帝和韵せられし也 絶海法師ハ永和二年正月飯朝すと云ふ

三輪崎

新宮より那智山に行海也 新宮より一里半あり能^キ地景也 絵島・九島^(孔島)・赤島など云島海中に

夫木抄

三輪の崎夕させば村千どり 佐野のわたりに衣うつなり

定家

万葉六

三輪が崎荒磯も見えず浪立ぬ いづこゆ行かんよき道^{道もなしに}もなし

夫木抄

まうさばや浪のよそにも三輪力崎 佐野の舟橋かけし思を

此名所諸書に大和国とし又近況の名所とす 大和は海なき所なるにあら磯夕浪などは読むべからず 又近江に入ルは汐^{立つ}なき海などとは読むべきものか 紀州の名所なるべし 此浦つゞきに佐野有

佐野 松原 岡

三輪崎のつゞきに有 人里有佐野村といふ 松原は佐野地^{村に?}につゞきたる海濱の松原也 松原中に王子社あり佐野王子と号す 岡山は佐野村の北八町計に有 勅選名所集に牟婁郡に有と云へるは是也 惣て佐野は諸国にありて古歌皆入遠也 佐野舟橋は上野国・佐野池河内国・佐野市は和泉国・佐野ノ岡は紀州也 古歌に三輪崎を讀入しは紀州なるべきか

秋津浦

佐野の前なり浜を云也 諸書に秋津野と秋津浦を同所とせり 秋田野は田辺に有 秋津浦は此所也 秋津野には海浜なし

名寄

藻刈舟秋津の浦に棹さして 思ふつまとり漕ぎつゝぞゆく

盧主法師

此浦の海浜につゞきて目覺山と云有 昔文覺上人読まれしとて土人の口にありし

目覺山おろす嵐のはげしくて 高根の松もね入らざりけり

鳴耶浜

新宮より那智へ行く海浜也 佐野のつゞきに宇久井浦と云所有 夫より西の方十五町計に有 土人公事（狗子）浜と云 大公事・小公事といふ人里有る故なり

懷中

なくさます名をたつ人は夜ともに ねをぞならやの浜のまにく よみ人不知

哭澤森 渚社

那智山の麓に浜の宮と云所あり 是なん泣沢の森ともいふべきか 井蛙抄には哭沢森渚森共に紀州に在といへり 藻塩草に云渚神は熊野那智ノ辺の王子なりと云々 此説によれば浜の宮なるべし哭沢の森覺束なし 哭沢の森は啼沢女ノ命ナキザメならばさもあらん 此事知る人なし 土人は三所權現なりといへど藻塩草に王子也と云へり 此宮の傍らに一宇の觀音堂あり又西方に寺あり補陀落寺と号す 當時の住僧命終え時は生ながら補陀落山渡海と云ひて 新船を送りて二三日の食物を入レ風に任せて南海に旅立つと也 其外昔は僧俗によらず多く生ながら入水せしと也 平維盛もかゝる事をや習て此浜より出船せられしが 今は此事なし 住僧の死骸を水に沈むと也 海の宮の海中に綱切島と云あり 補陀落山に渡海の時此処にて綱を切と也 帆立島と云所あり此島にて渡海の帆を上る也 私曰、死たる人海に沈ムる事四葬の中の一なれば左もあるべし 生ながら水に入る事覺束なし いかん生ながら入水すること心いたらずんば 補陀落渡海は戒がたし 竊に業ずるに浜宮は釈書に出たる絵馬神か 昔天王寺に道公法師と云人あり多年法華を唱持す 或年熊野山に上りて一夏を終り天王寺に皈る時樹下に宿す 夜半の頃騎馬の音三十余人樹下に来て呼レ之 曰翁ありやと樹下に答云有と其時外より来レる人曰 何と

【釈書二ハ明二美名部と書ス 日高郡南部也】

して我等より先にはゆかざるやといへり 翁ノ白馬の足損じて歩行成がたしといへり 三十余人共に行去ルとみれば夜はほのぐと明ケぬ 道公不思議に思ひ樹下を見れば小社あり 前に絵馬あり前足の所板破れたり 道公糸を以て是をつなぎ次の夜試しに樹下に宿しければ 又如三前夜三十余人来て翁有るやといへり 翁ありと答へて馬に乗りて出て曉に飯て道公に語曰く 我は行疫神也 一夜出デされば答罵せらる 師の馬足をつなぎ給わりし故其のはづかしめをのがれ侍る事尤も幸也と云 さまぐにもてなして語云 我此身叢口の神成ル故かゝるつかはれて答を受くることはかりがたし 願は師の慈力によりて補陀落山に渡海し観音の眷族とならんと思ふ 此木草を以て船をつくりて我木像を海上に浮べよといへり 道公願の如くせしかば草船即南を指シて馳行く事偏に飛が如し 村里人の夢に樹中の菩薩と成て身金色にして南方に去ると見

【道祖神を祭れるは日高郡美名部ナル事釈書にあり】

ゆ事同事たり 此事釈書第九卷に載たり 今思ふに浜宮は此神を祭るか 又観音堂あり 又補

陀落渡海の事は 此神の事を擧ぐ云々 一見の時絵馬神の事を尋ねしに外に絵馬神と云うものなし 補陀落渡海のこと其本ならんありし 私三輪須恵の儀なれば猶後人に尋ぬべし

万葉二

なきさはの森にみわすゑいのれども 我大君は高日しられぬ

人丸

続古今

むらしぐれいくしほ染てわざつみの なぎさの森の色に出らむ

衣笠

浜の宮の前なる浜を赤色の浜と号す 又沖に島あり山成島と云 平家物語に曰、平維盛浜の宮の前より一葉の船に棹さして萬里の蒼海に浮び給ひ 遙の沖に山成島と云所あり 三位中將其小船漕寄させて岸により 大なる松の木を削りて名を路を書付壽永三年三月廿八日那智の沖にて入水と云々 私曰、山成島は勝浦の東南十七八町に有 平維盛山成島にて名路籍を書付入水と偽りて色川の里大野村と云ふ所に隠居せらる 今見るに大野村に維盛居住の所あり藤岡の要害と号す 又維盛の滅後に土人憐れみて祀る 今維盛の社とて大野村の西一町計に有 維盛入水と号せし時によまれし歌に

今ぞしる弥陀の誓のふかくして 浪の上にもはすすありとは

那智山

上レ夫云々

名寄

那智山の雲井に見ゆる岩根より ひろにかゝる白糸

光明峯寺

玉吟

雲かゝる那智の瀧つせ風吹かば ふるき軒端に玉ぞ散ける

家隆

夫木

雲かゝる那智の高根に風吹かば 花ぬきくだす瀧の白糸

仲正

続古今

那智の山はるかに落つる瀧つせに すぐぐ心のちりも残らじ

式乾門院

二の瀧

此瀧は一の瀧より上にありて往来の人の行所にあらず わざと此所にのぼらざれば見がたし
昔花山院此所に御居住三年也 神社考曰、花山法皇入ニ那智一不_ル出_{コト}三年矣 今見るに御庵の
跡あり又御所持の土器等残れり 傍に櫻木あり

法皇御製

石ばしる瀧にまがひて那智の山 高根を見れば峯の白雲

栄華物語

木の下をすみかとすればおのづから 花みる人になりにけるかな

とつらね玉ひし櫻也といへり 風雅集に曰、那智に籠りて瀧に入堂し侍りけるに 此上に一二
の瀧おはします それへ参る也と申 住僧の侍りけるに具して参りたり 花や咲きぬらんと尋
ねまほしかりけるに 折節にてたよりある心地してわけ参りたり 二の瀧のもとへ参りつきた
りければ 如意輪の瀧となん申すなど聞き拝みたりければ 少しかたぶきたるやうに流れ下り
りてたふとく覺へけり 花山院の庵室の跡侍りたる前に 年なりたる櫻の木の侍りけるをみて
すみかとすればとよませ給ひけんことを思ひ出でられて

木の下に住みけん跡をみつるかな 那智の高根の花を尋ねて

西行法師

後千載集云、那智にて庵の柱に書付ける

おもひきや草の庵の露けさを ついの栖_{スミカ}と頼むべしとは

前大僧正行尊

鳴瀧

那智山の西口色川郷宮川村の東に有 鳴瀧と云あり或は鳴瀧は那智の瀧の一の瀧の事也 山上
山下に響き渡れば鳴瀧と云へり 色川の里の鳴瀧に非ずと云々 然れども此歌は権現の告_ゲさ
せ給ひし歌にして 思ふこと身にあまるまで 鳴瀧のとよませ給ひし故

新古今神祇

思ふ事身にあまるまで鳴瀧の　しばしよどむを何なげくらん

此歌身の沈める事を嘆て東の方にまからんと思ける人の　くまのゝおまへに通夜して侍りける夢に見えけるぞ

玉浦　離小島

那智山を浜の宮に下りて海辺の道大辺地と云　浜の宮のつゞきに勝浦天満などいふ所あり　勝浦の辺の浜には温湯多し　二河^{ニガハ}乃湯と云も勝浦より十町計西の海辺也　夫より猶西の方に粉白浦と云所あり　玉浦は粉白浦の西南十町計にあり　離れ小島とは玉浦の南に海中に散在せるこ岩あり　是を離小島と云成べし　此辺別に島なし

万葉七

あり磯にもまして思や玉の浦の　はなれをじまの夢にし見ゆる

玉吟

小夜更けて月かげ清み玉の浦の　はなれ小島に千鳥なくなり　忠度

塩崎浦

大辺路に有人里也　上野村^{ウヘノ}と号す　海中長き出崎也　此所は塩の御崎とて汐極めて早し　渡海船の難所也　のぼり塩下り汐とて年を重ねて片瀬にゆく　世上の汐の満干にかゝはらず尤不思議也　此所に三前神社とて少彦名命をまつる社あり　日本書紀曰、少彦名命至熊野之御崎遂適^{クニ}ニ常世郷^ニ　又云^ハ至淡島^ニ而縁^ノボリシ^{ガベガラ}　粟莖^ニ者則彈^{カレ}渡^リマシ^ニ而至^ニ常世郷^ニ矣とは此神の事か　三代実録曰^ク清和天皇貞観十七年冬十月十日年己未授^ニ紀伊国正六位三前神從五位下^ニ

山家集

小鯛引くあみのかけ縄よりくねり　うきしわざある塩崎の浦　西行法師

有馬村　産田神社　花窟

新宮より勢州の方へ五里計行て木ノ本と云所の南二十町有馬といふ所有　産田神社花窟此所に　有　伊弉冉尊を葬りし所と云へり　一説に花窟に葬りたりともいへり　神代巻云、伊弉冉尊生ニ火神ニ時被^レ灼神退去矣故葬ニ於紀伊国熊野之有馬村ニ焉土俗祭ニ此神之魂ニ者花時亦以^レ花祭又用ニ鼓吹幡旗歌舞^ニ矣　纂疎曰古事記旧事紀等ニ謂神去葬^下出雲国与^ト伯耆之国^ニ堺比婆山^上云々　神代巻と不^レ同

夫木抄

神まつる花の時にや成ぬらん　有馬の村にかゝる白ゆう

光俊

春風に梢ささゆく紀の国や ありまの村の神にまつりせよ

読人不知

白河院熊野に詣玉ふ時 道の辺の花盛んに開けるを見て読玉ふ

新古今

咲匂ふ花の錦を見るからに 神の心ぞ空にしらるゝ

一説曰、産田神社は伊弉冉尊の葬所也 花窟は火神なりといへり 花の窟の山の高サ廿四五間也又湯拌窟と云 廬主家集に曰、此浜の人窟のもとまで着きぬ 見ればやがて窟の中なり 中

【温拌 涅槃ノコトカ 諸書ニ般若窟ト云フト見ユ又隱窟・産立窟ト云トモアリ】

をうかちて経をこの奉りたり 此ハ弥勒佛の出給はん世に取出し奉らんとする経也 天人常に下って供養し奉るといふからにみれば 此世に似たる所もあらず 卒塔婆の苔に埋れたるなど有 傍に王子の窟と云あり只松のかぎり有る山也 其の中にいちこき紅葉などあり神乃山と見ゆ

のり(法)こめて龍のあしたを待つほどは 秋の名残ぞ久しかるべき

慈恩寺

四番組大内川村の中ニ有永命山と号して禪宗也開基分明ならず 元亨釈書仲纂伝曰、仲纂安和二年於ニ熊野山那智瀧下ニ講ニ般若心経ニ忽チ現スニ千手千眼ノ像ニ講シ己リ昇ニ岩上ニ自レ此不見 或人曰、入ニ慈恩寺山ニ而後不出唯遺スニ草鞋ヲニ云

楯崎

木ノ本庄二木島と云所より海上二里計出て此楯崎あり 昔ハ此所勢州と紀州との堺也といへり 土人の説なり 海上の晴たる時ハ新宮神藏山より見ゆる也

家集

打浪にみちくる汐の戦ふを 楯ヶ崎とはいふもありれる

廬主

三木浦

木ノ本庄小脇村の南一里計北三十町計に有 此所昔志摩国也といへり今紀伊に属す 西行山家集曰、新宮より伊勢へまかりけるに三木島に船のきたしける 浦人黒き髪一筋もなかりけるをよびて

【よびよせて 読ける】

年経たる浦の海士人こととはむ 浪をかつきて幾代過にき

松本

黒髪は返ると見えし白浪を かづきはてたる身には知る海士

錦浦

尾鷲庄大曾根村の東南七・八町九鬼村の西北二里計に有 中古行野村の民家を移して今は行野と云ふ也 元亨釈書第十八巻釈陽勝伝曰、勝熊野山乃松本嶺の逢_ニ叡山ノ旧友_ヲ談本而去ル

長島ノ庄長島村の東一里計に有 浦の長八九町計有 此所元は志摩国也今紀伊に属す 名所の諸書に志摩国に入レ或は伊勢ニ入ル

名寄

なきまぜて有を御□□□よるらば にしきのうらと見ゆるなりけり

同

こきま勢_サる柳櫻もなかりけり にしきの浦の春のあけぼの

中務親王

△未_レ考_分

伊那瀧

夫木抄に紀伊国の名所と有レども不知 案ずるに日高郡印南原の瀧なるべしや 此所勝地にし
て瀧あり寺を瀧峯寺と号す

万葉七

いな瀧にきすめる玉は二つなし こなたかなたも君がまに_く

市原王

潜覺抄第五に此歌を注して曰、いなたきとはいただき也 来すめるは来りすむ也 心は帝王は
髪中明珠とてみづからの中に玉をいたゞき玉ふなり 然らば彼の一の珠をいつかたにおかんと
も御心にまかすべき也 今彼玉をたとへにかりて我思ふ心いさぎよくふたつなしと 君が思は
んまゝにとにかくもしたがはん_とよそへよめる也 此説によらば名所といひがたし 猶後人に
尋べし

岩根岸

松葉集

名寄

松が根の岩根の岸の夕すゞみ 君があれなどおもほゆるかな

西行

右熊野へ参りて岩根と云所にて読て京へ遣しける

千草嶽 藻塩草

家集

わけて行色のみならず梢さく 千草の島はこころそみけり

西行

緒捨山

万葉七

年つもるをすての山の槇の葉も ひさしく峯はこけ生ひにけり

人丸

加信土山

藻塩草十二かしと山花のさかりや今なりし 木方の雲の立渡る見ゆ

光俊

藻塩

朝もよひきがたへ乃行にかしこ山 越えなん今日よ雨な降り来ぬ

【加信土山は伊都郡待乳山ナリ このこと紀伊名勝略志考記せり】

手綱ノ浜

万葉九

遠 し高ふありせばしらずとも たづなのはまの尋きなまし

袖島

藻塩草五

塩たるゝ海士の袖島こぎかくれ 沖ゆく舟もひとよくらん

前内大臣

曾許比浦

万葉十五

みつ塩のそこひの浦にくらぶとも 我衣手は や志つまん

後九条内大臣

夏實ノ浦 酢蛾島

八雲御抄
藻塩草

須が島のなつみの浦による浪の あひたも置いて我君いなくに
我せ君心のまゝに須が島のことななつみのうららみてぞ行

人丸
俊頼

大葉山

八雲御集
仙覺集

万葉九

大葉山霞たふ引小夜更けて 我船いでむ泊り志らずも

八十須美坂

堀川

もえたゝぬ八十須美坂の白つゝぢ 志 人ハ見るこそ とも 俊頼

古畑

家集

ふる畑のそ のたづきに居る鳩の 友よぶ声のすぎタぐれ

西行

深山^{フカ}

此名所名寄に紀伊国といへり 大峰山より熊野へ越す山路と見ゆ 詞書に曰、大峯の深山と云所にて月を見てよめる

乞許世山^{コチユセ}

名寄 ふかき山にすみける月を見ざりせば おもひ出もなき我身ならまし 西行

教木

鳴きおくれこちこせ山のほとゝぎす きなくの里の松の●●間に

【こちこせ山 和漢三才圖會紀州に載せり

万葉集 わがせこをこちこせ山と人はいへど きまさす山の名にあらじ】

蟻の戸渡り

家集 ○○さゝ深みきり すゝきを朝立てなびきわずづらふ蟻の戸渡り 西行

會野

雲葉集 別にし君に逢野とおもひせば しげき露おも嘆かざらまし 行意

順和名は名草郡の内大野と有 大野所々に有

篠宿

【大峯山の東南二十余町の所に小笹の宿あり 此処なるべきか(芝口)】

山家集つゝのすく々に

庵さす草の枕に友なれて さゝの露にも宿る月かな

西行

曝井

万葉九 みつくりの中にむかへる曝井のたゝすかよ むへそこにつまもか

夫木抄 みつるすの中にむかへて結らん うすき衣のつらしさらし井の水 公朝

此名所五代集の歌枕に紀伊国名所と有 熊野路芝村辺に栗栖川の庄といへる有 順和名抄に牟婁郡の内に栗栖といへる所を出す 又和歌山の東一里計に栗栖村と云有 然れどもさらし井と云所なし いづくとも定めがたし後人に尋べし みくるす・みつくりの志な仙覺抄十一に記

左双山

万葉 さぬ山にうつやおののとほくとも ねもとにかころおに見えつゝ人丸

屏風島

名寄歌枕藻塩草四巻に紀伊名所といへり 案ずるに大峰より熊野へ行道に有とて 詞書曰、行者還児のとまりのと云所につゞきたるすく^宿也 昔山伏は屏風ヶ島と申所をたひらかにへむ事をかたく思ひて 行者還児のとまりも思ひ煩ふ成べし

山家集

屏風にや心を立てゝおもひけん 行者はかへり児者とまれと

西行

桧原嶺

山家集

夕されやひばらの峯を越え行けば すぐく聞ゆる山鳩のこゑ

西行

的形浦

藻塩草四巻に紀伊の名所とあり

藻塩草

的かたの浦の千鳥も波立は つまこひ立て遍舟をつくも

百重山

此名所夫木抄紀伊国名所とあり 熊野山の幾重ともなる重るを 浜ゆふに寄せてよめるなるべし 仙覺抄六二曰、浜ゆふは芭蕉に似て小さき草也 莖幾重とてなく重りたる也 へだてゝみれば凡て紙などのやうにへたての有也と云々

夫木抄

三熊野やきちより越る百重山 おなじ数なる浦のはまゆふ

公朝

奥島

此名所は海士郡椒村の西の海に有 土人今も沖の島と云也

雑賀野ゆそがひにみゆる奥島^{オキノシマ} きよきなぎさに風吹かば云々

此歌は万葉の十六巻に出て赤人の歌也 雑賀野ゆそがひに見ゆると云ふに叶たる椒浦の島也 然れども紀の人は是を浦の初島なりと云 故上に記し侍りし 案に浦の初島は加太浦の蓬島^{トヤガシマ}にて奥の島は椒浦の島なるべし 形見浦妹が島八田辺と瀬戸との間に有 是も土人の説によりて加太浦になして上に記し 又浦の初島は攝津の国にもありといへり 然れども泉州堺浦より難波尼崎灘兵庫須磨迄の間に浦の初島いふ処なし 宗祇の国分に攝津国浦ノ初島在所分明ならず云々 惣じて攝津の海には島なし 或人の語り侍るは攝津の海よりも加太浦^カの島 見渡なれば

津ノ国に読合たり 紀伊の浦の初島と同所なるべし 和泉の国より紀伊の方へ行ハ賀田浦 島
は紀伊の海の島の西なる故浦の初島と云也と

あな恋し行てや見渡し津の国に 今もありてふ浦の初島

此歌によりてみれば津の国のあるやうなれどもかく云所なし 但しありや覺束なし 然共
紀路の人は加田を形見浦となし 淑浦の島を浦の初島也と語り侍る故 奥^{オキシマ}島を未考の中に入
たり 是皆私の儀にして いまだ証拠なければ後人に尋ぬべし

右二十四所諸書に出て紀陽の名所たりといへども いまだいづくとも定めがたし 後人
に尋ぬべし

終

株宏菴所_レ作紀ノ路草一卷始_メ寄_セニ想_ヲ於和歌吹上之月ニ終_リ閣_クニ筆_ヲ於熊野有馬之花ニ最_モ
関南勝槩陳迹興懷竭_キ盡_テ而亦無_レ餘何_ソ求_メニ於人ニ何_ソ待_タニ哉於外ニ可_レ謂尾張千里一宿ニ藏
小冊ニ吾_レ読_レ之欣然忘_レ食夜以繼_グ昼ニ不_レ知芸窓之裡復_タ有_ヲニ何_ノ書ニ可_ベキヤニ以代_レ此_ニ也
元禄八年仲秋日

梅岸子書

右紀路艸上下二卷

安永六丁酉(一七七七年)寫之

西莊文庫

昭和三十年七月一日和田喜久男氏より借用して寫之畢

芝口 常楠

原本文字はよく書きたれども寫しちがひの誤字あり 誤りの明かなる所は訂正しをきたるも 猶不明な処あり？を附しておく 赤字は多く小生の記入なり

本書は芝口氏の後書にもあるように、和田氏の所蔵にかゝるもので、和田氏はこれを姫路の古書店の目録を見て購入したものである。原本は頗る文字が読み難いので、先ず芝口氏に寫して貰い、さらにそれより転寫した。

昭和三十年九月廿七日夜 公社事務室にて

颱風第二十二号本土接近の報ある夜

清水 長一郎

転写しながら三百年以上も前の旅行記に、その土地の記録だけでなく、万葉集を始めとした古い文献から関係の事を調べ上げている。何処に行けば調べられたのだろう。
〔六八九年〕元禄二年の児玉莊左衛門『熊野獨参記』がよく知られているが、数年後にこの紀行文があったのは案外知らないのではないか。

平成二十(二〇〇八)年五月二十四日

清水 章博